

## 参向公家衆御馳走仕法改革と御賄方料理人足の商人請負について

市川 寛明\*

### 目次

- 一、はじめに 本稿の課題と構成
- 二、安永・寛政期における参向公家衆御馳走仕法改革
- 三、嘉永二年における伝奏御賄方料理人足の請負実態
- 四、結論
- 五、史料紹介

キーワード 日用人足請負商人 米屋田中家 伝奏屋敷

参向公家衆御馳走役 参向公家衆御馳走仕法改革

御賄方御料理方働人足

### 一、はじめに 本稿の課題と構成

本稿は、安永・寛政期に構想・実施された、参向公家衆に対する御馳走仕法改革の概要を明らかにするとともに、日用人足の請負商人米屋田中家の伝奏屋敷における御賄方料理人足の請負に関する嘉永二年（一八四九）の経営帳簿を分析し、その実態を明らかにすることを課題とする。あわせて考察の基礎となった嘉永二年の経営帳簿二点を翻刻、紹介する。

本論に入る前に本稿で使用する語句について補足をしておきたい。ま

ず参向公家衆・伝奏屋敷とは何であろうか。これについては以下の史料が参考となる。

### 【史料1】

当月（三月）上旬之内、関東へ年頭之御礼として勅使を被差下、勅使は武家伝奏兩人、院使は院伝奏、法皇使、女院使、東宮使、女御准后使等、御所方有合次第、大方は兼合公家衆五人計参府有（中略）凡道中筋如何成大名諸旗本の往来も行違事不叶、不図出合頭駕籠を田面に引隠れ、堂上方雑人下郎の行過る迄待せらる、勅の威は勿論、殊更関東の御権勢也、勅使各関東御下著之處は、伝奏屋敷とて大名小路に御屋敷有、則御評定所の隣也、常々御徒頭格の士兩人、堤野村之何某留守居仕なり、外之公家方は似合似合に居館を預け下され、伝奏衆を始、何れも五万三万石位の大名方を御馳走人に被仰付、御公儀よりも御旗本御寄合衆等の内にて、心得能物馴たる仁を被為添、山谷海河の珍物厚味、朝夕の御饗応、公家衆の御膳下ると否、御馳走人の御大名方、御自身膳具を御改被成、禁好物等を尋求探り、伺書記させたまひ、城主の御身にて、公家方小祿の青侍共に御言葉迄謙りたまひ、昼夜の機嫌、起居の様躰、飲食沐浴等の節程等、心を尽して御饗応有御事共、実に天下の余光也<sup>1</sup>。

これによれば、毎年三月上旬、武家伝奏二名が年頭御礼の使者として江戸へ派遣され、幕府から命を受けた三万石・五万石の大名が御馳走人

\* 東京都江戸東京博物館学芸員

となつて自ら近侍して江戸に滞在する勅使の御馳走にあたつた。この時、江戸に参向した公家衆の滞在先となつたのが大名小路にあつた伝奏屋敷であつた<sup>2</sup>。伝奏屋敷に滞在中の公家衆へは、贅を尽くした「山谷海河の珍物厚味」の食膳が提供された。この時御馳走の対象となつたのは、公家衆はいふまでもなく、その家臣団である「小祿の青侍共に」いたるまで全て謙つた言葉使用で丁寧な饗応された。食事の嗜好や様々な要望をかなえるための大名たちの献身的な接待を受けた公家衆にとつて、江戸への参向は「天下の余光」を痛感する数少ない契機となつていた。

元禄期のいわゆる赤穂事件の発端にもなつた事でひろく知られているように、一七世紀段階の勅使の御馳走役は大名勤役であつた。その勤役は、公家衆の品川宿着輿を起点とし、江戸での諸儀礼を終えて、再び品川宿を発興する迄の一〇日余りが大名の請負範囲であつた。参向公家衆の御馳走を命じられた大名の役務は「江戸に下向した勅使等の公家衆に對し、その在府中の一切の接待をするという重い役務であつた」（平井一九八八、小林二〇一八）。実際に御馳走人をつとめた大名が記録した「勅使御馳走日記」を分析した小岩弘明氏は、御馳走役大名が幕府へ提出した全三八箇条にもものぼる伺書の内容を紹介し、御馳走役大名がいかに細心の注意をはらつてこの御馳走役を務めたのかを明らかにしている（小岩二〇〇三）<sup>3</sup>。

定例となつていた年頭祝儀の勅使以外でも、院使・女御使・准后使など様々な公家が將軍への使者として派遣されることがあつた。田中晁龍氏の研究（田中一九九七）によれば、江戸に公家衆が勅使として派遣されるのは以下の一〇種類の場合があつた。①年頭勅使、②將軍宣下や贈官位、神号勅許、③御礼（將軍の継続、官位昇進など）、④祝賀（本丸への移徙、將軍上洛、將軍即位、將軍の病氣全快、世嗣誕生など）、⑤歴代將軍の周忌法会、⑥東照宮正遷宮、⑦日光幣礼使、⑧公武間の婚姻、⑨御見舞（將軍の病氣、江戸大火など）、⑩幕命による。このように勅

使派遣の名目は多様に存在したが、公家と幕府との接触を管理するため、「寛永期頃、江戸参向の公家に対する幕府側の儀礼・饗応の制度化がはかられ」、「將軍吉宗の時代以降は、一年に一度の年頭勅使の江戸参向の中に、②③④のような理由を兼ねて出向しているのが一般的」となつていったとされる。このように江戸には様々な理由で公家が派遣されており、それらを総称して参向公家衆と呼ぶ<sup>4</sup>。

このように参向公家衆御馳走役に関する研究は朝幕関係史の観点から着実に積み重ねられてきた印象を受ける。しかしこれとは対照的に参向公家衆御馳走役の商人請負の実態は史料的な限界もあつて殆ど解明されてこなかつた。本稿は米屋田中家文書という恰好の素材を分析対象に据え、参向公家衆御馳走役を実際に請け負つた商人の経営帳簿を分析することで、請負商人に関する初めての研究成果を問うものである。

米屋田中家文書では、伝奏屋敷に逗留中の参向公家衆への御賄を伝奏御賄と表記し、伝奏屋敷における御賄、あるいはそのために必要な人足の請負といった意味で用いられており、本稿でもそれにならつて伝奏御賄の用語を用いる。米屋田中家文書において伝奏御賄という文言が登場するのは、嘉永七年（一八五四）の段階で米屋が所蔵していた経営帳簿を書き上げた「諸家公諸御用帳歳々記」<sup>5</sup>（以下、「歳々記」と表記する）においてである。筆者はかつて、この「歳々記」をもとに米屋の家業構成を分析した（市川二〇〇二）。これによれば、米屋の家業は、行列系（参勤交代、日光社参、大坂加番などの通日雇請負）、門番御固系（江戸城門番、増上寺・寛永寺における御固）、伝奏御賄、の三つに分類・整理された<sup>6</sup>。伝奏御賄は、米屋田中家の家業を構成する三本柱のひとつであつた。米屋の家業の三本柱のうち、行列系と門番御固系の経営帳簿は、請負先大名家別・年代順に記載され、米屋の屋敷に実際に所蔵されていた経営帳簿群も、その原則によつて配置されていたはずである。しかし伝奏御賄だけは年代順に整理され、請負先の名前記載が一

部の例外的なものを除いて殆ど確認されない。こうした記載原則の違いは、伝奏御賄が大名家からの請負ではない事を示唆する。では伝奏御賄が大名からの請負ではないとすると米屋はどこからこれを請け負ったのかという疑問が生じる。赤穂事件の事例が示すように一七世紀段階に大名役であった参向公家衆御馳走役は、次第に御馳走役大名から米屋のようない日用人足を多数差配する商人による請負へと変容したと推測されるが、参向公家衆御馳走役の請負商人であった米屋の帳簿から、発注元の大名の名前が確認されないとすれば、一八世紀以降のどこかで大きな制度変更があったことが強く推測される。しかしその実態はこれまでの研究史のなかではまったく明らかにされていない。

伝奏御賄をめぐるこうした疑問は、米屋田中家の研究を進めるうえで大きな難問となって立ちはだかつてきた。なぜ米屋田中の伝奏御賄は大名家からの請負の形式として帳簿上あらわれないのか、換言すれば、伝奏御賄の発注元はどこなのかという疑問を解明しなければ、米屋田中家文書の伝奏御賄関係文書を分析しても、それは単なる史料紹介の域を脱し得ないことが懸念される。しかし今回、安永・寛政期の参向公家衆御馳走仕法改革の実態を明らかにするなかで、なぜ伝奏御賄だけが大名家からの請負でなくなったのか、その原因を明らかにすることができた。そこで本稿では、まず安永九年（一七八〇）・寛政二年（一七九〇）の参向公家衆御馳走仕法改革をとりあげ、制度史・政治史的な観点から安永九年以前の参向公家衆御馳走体制の実態と問題点、それを解決するための寛政二年の仕法改革の概要を明らかにする（第二章）。次に嘉永二年（一八四九）の米屋田中家文書に現存する経営帳簿類を手掛かりに、米屋による伝奏御賄請負の請負実態を明らかにする（第三章）。最後に主要な分析対象となった嘉永二年の伝奏御賄請負関係文書のうち主要な二点を翻刻、紹介する（第五章）。

## 二、安永・寛政期における参向公家衆御馳走仕法改革

### （一）御賄請負商人の成長過程

参向公家衆の御馳走役の請負に商人はいつ頃から、どのように関与しはじめるのであろうか。残念ながらその成立過程を解明した先行研究は存在しない。そこで本稿では、安永・寛政期に実施された参向公家衆御馳走仕法改革をめぐる議論によって顕在化した請負商人への過度な依存状況を明らかにするが、その前提として、一七世紀後半から一八世紀後半期の江戸において、各種の入札や町人足役の代銀納化を可能にした請負商人の事例をとりあげ、御賄方料理人足の請負商人の成長過程を跡づけてみたい。

#### イ) 天和期の御賄の入札

江戸の町触に御馳走役に関連して入札が実施されるようになったのは一七世紀後半、天和期のことであった。

#### 【史料2】天和二年七月

一、朝鮮人來朝二付、伊奈兵右衛門殿御代官所、三島・箱根御賄魚鳥、入札二被仰付候、望之者ハ御台所御買合値段を以差引考、入札認、来ル十二日増上寺門前切通伊奈兵右衛門殿江持参可申旨、町中不殘可被相触候、以上<sup>7</sup>

この町触は、朝鮮通信使一行が三島・箱根に宿泊する際の御賄に必要な生鮮食料品を確保するための入札を江戸で実施するためのものである。管見の限りこの町触が御賄関係の入札事例の初見である。入札が実施される背景には、それを請け負い得る商人の成立が前提となっており、一七世紀後半の時期における都市社会における請負商人の成立を示す証左として注目しておきたい。

では次に本稿と直接関係する参向公家衆の御馳走役に関する入札記事を探すと、その初見史料は、朝鮮通信使の御賄物入札の初見記事から二年後の天和四年の町触にみられる。

#### 【史料3】天和四年二月

一、今度公家衆并御門跡方御参向二付、御賄方鳥肴八百屋木具菓子、入札二被仰付候間、望之者ハ来ル十七日、本郷三町目裏、肴棚近所御弓町今井九右衛門殿御宅へ入札持参可申候<sup>8</sup>。

このように一七世紀後半において参向公家衆に対する御賄に供される物資の商人請負が、労働力の商人請負に先行して、実現している点に注目しておきたい。

#### ロ)労働力の商人請負（公役人足）

幕府が江戸の町に課した夫役のひとつに町人足役（公役）がある。これは江戸の武家地・寺社地・拝領地・国役町を除いた町々にひろく賦課された夫役で、その種類は現在知られているものだけでも二九種類に及んでいる（吉田一九八四）。この町人足役のひとつに公家衆御馳走所町料理人、御伝奏人足といった伝奏御賄関係の人足役が存在していた。一般にこれらの町人足役は一七世紀後半以降次第に代銀納される事例が増え、それを原資として商人による請負化が一層進展し、最終的には享保八年に町人足役の全面的な代銀納を制度化する改革が実施された。その間の変化をよく示す明和八年の史料を次に掲げる。

#### 【史料4】

町方ニて取扱諸向差懸、少分之為急御入用金貳百両宛度々申上、御金蔵より町年寄共方え為請取置諸払仕候。若御入用之儀、今般格別ニ御儉約被仰出候二付、猶又減方之儀町年寄共え申付為相糺候処、右御入用之内

諸向御用人足之儀、享保七年寅年迄ハ町々より役人足差出相勤申候処、同ハ卯年大岡越前守町方勤役之節、町々より人足差出候儀相止、賃銀にて相納候様申渡、右賃銀は当時町方より相納候公役金にて御座候。右之通賃銀納ニ罷成候二付、諸向御用人足之儀ハ請負人出来いたし候て、人足差出、賃銀ハ町年寄共方にて相払来候儀ニ御座候<sup>9</sup>。

これによれば享保七年までは町人足役（公役）が町々から現夫で徴発されていたが、享保八年から現夫に代わって、その分の賃銀を公役金として上納する制度改革が実施された。その結果、それまで町人足役（公役）によって担われてきた様々の諸向御用は請負人（商人）が担うように変化したのである。この史料は享保期の変化をわかりやすく示しているが、事実を単純化している。実際には、はやくも延宝六年（一六七八）に入札が実施された御置人足の事例からもわかるように、町人足役は一七世紀後半以降、請負商人の要望等により徐々に入札される事例が増えていった。そうした現夫から代銀納への変化は、町人足役の代銀納化改革の結果として現実したものではなく、あくまで、請負人がこれを代替するようになったのではなく、請負人が次第に公役を担いうる商人の成長の結果であり、請負商人の成長によって、代銀納制の導入を可能にする素地が徐々に生じていったのである。

興味深い事にこの「明和撰要類集」には、代銀納化された各種公役の賃銀が左のように記されている。

#### 【史料5】

一、公家衆御馳走所町料理人 壹人二付銀五匁宛

此賃銀之儀は御馳走之武家方え賃銀にて相渡候儀にて、元文元辰年ニも割増等ハ無御座候、前々より右之通御座候

一人につき銀五匁の公役銀単価の高さも気になるが、ここでは公家衆御馳走所町料理人の公役銀の納入先が通常の町年寄ではなく、「御馳走之武家」になっていた点に注目すべきであろう。このことは江戸時代初期に大名と町人足役の二本立てとなっていた参向公家衆御馳走役が大名による請負へと一本化されていた点を示すものである。このように参向公家衆御馳走役は大名役と町人足役によって担われていた段階から、大名役に一本化されていたのであるが、なぜ大名役に一本化されていたのか、その背景は未詳である。本稿の立場は町人足役と平行して大名役も商人による請負化が進んでいたからではないかと推測するものであるが、それを裏付けるように、町人足役が代銀納化される直前段階の享保六年の史料では、大名役の商人請負が進行していたことをうかがわせる。

【史料6】『江戸町触集成』五七三九 享保六年正月

町料理人伝奏御馳走方、其外御屋敷江被雇候節ハ刀帯申候、平生ハ無刀二面外之かせき仕候、尤町方等江雇候節は無刀二面参候儀ニ御座候、御城江罷出候節ハ脇差斗差申候

町触の内容としては、本来武家方に雇用される時だけに許されたいた町料理人の帯刀の特権が、町方で雇用される際にも敷衍され、猥りに横行していた点を問題視したものである。帯刀がもつ社会的な意味を考えるうえで興味深い内容をもつが、本稿の問題関心からすれば、武家や商家から料理を請け負う町料理人という人足が享保六年段階ですでに成立している点に注目したい。なぜならば町方・武家方をまたいで雇用される町料理人足の成立は、伝奏御馳走所の町人足役を請け負う商人の成立と無関係ではありえないからである。日用人足請負商人も、たとえば鳶人足のように職能の異なる人足ばかりを多数集めて伝奏御賄方料理

人足を請け負うことはできなかったと考えられ、町方にこうした町料理人が必要かつ十分に成立していなければ大規模な商人請負は不可能であったはずである。その様に考えると恐らく米屋のような日用人足請負商人は、こうした町に簇生しつつあった個々の町料理人足を多数糾合して、伝奏御賄方料理人足を請け負っていたのではないかと考えられるのである。

ハ) 米屋田中家の仕出御賄請負について

参向公家衆に対する御賄の物資調達入札が始まった天和四年(一六八四)から三三年経過した享保六年(二七一七)には、町方に武家の賄需要を満す料理人足の存在が確認され、更にそれから二八年経過した延享二年(二七四五)の米屋田中家文書「記録」<sup>10</sup>には伝奏御賄に関する重大な変化を見いだすことができる。

【史料7】

一、大坂加番・公家衆御馳走二月五日頃二累年被仰付候間、正月廿日頃見合中に候処、前広ニ相動候事

この記述は年中行事の一部として書き上げられたもので、これによれば大坂加番と公家衆御馳走は例年二月五日頃に幕府から大名へ発令されることが多く、その直前の正月二〇日頃から御馳走役を命じられる可能性のある家には挨拶回り(御用聞き)をすることが重要であるとしている。この記載の要点は、第一に延享二年(一七四五)段階の参向公家衆御馳走役は依然として大名役であったこと、第二に幕府から大名に命じられた参向公家衆の御馳走役を商人が請け負うようになっていたことである。

米屋田中家の家業を確立させた三代久右衛門の最晩年における米屋の家業構成のなかで、公家御馳走役の請負は、どのような位置を占めたの

であろうか。その疑問に答える格好の史料が残されている。延享二年、米屋は多くの顧客層に配布するため、自らの家業の全体を書き記した商札を作成し、配布しており、その現物が残されているので次に掲げる。

【史料8】延享二年米屋田中家の商札<sup>11</sup>

一 町飛脚定日用 日本橋通壹町目木原店  
道中通し日雇通馬 米屋久右衛門  
仕出御賄請負

これは墨摺の極簡易な印刷物である。現代でいうと名刺と広告を兼ねたようなもので、これが大量生産可能な木版の技術で作成された印刷物であった点に米屋の経営史的な意義がある。米屋の家業を並列した紙片を印刷物にして大量に生産しようとしたのは、米屋の商いが特定の、恩顧の御出入り先大名だけに依存する経営形態から脱却し、不特定多数の大名家への出入関係の確保が米屋の経営にとってより重要性を増しつつあったことを示す証左に他ならない（市川二〇一八）。この延享二年（二七四五）の商札によれば、この段階の米屋の家業は、大名行列の通日雇を請け負いつつ、町飛脚や定日用、仕出御賄を同時に展開していたことがわかる。文化文政期以降の米屋の家業構成は、通日雇の請負、門番人足の請負、伝奏御賄の三本柱であったから、延享期から文化文政期にかけての家業構成の変容は、次のような特徴をもつものであった。①仕出御賄請負は伝奏御賄へと特化していったこと、②町飛脚・定日用が姿を消し、門番人足の請負が新たに成長したことの二点であり、仕出御賄請負が祖業の通日雇請負とならぶ重要な家業の柱となっていたことがわかる<sup>12</sup>。

この当時の仕出御賄請負とはどのような業態だったのであろうか。經

営文書を欠いている現状では、字義により推測する以外にないが、仕出御賄請負の業態は次の二つが考えられる。ひとつは、武家の日常的で小規模な仕出需要の請負を専業として営むもので、もうひとつは武家の御賄請負に仕出屋商いを兼帯していたという解釈であるが、筆者は後者が実態により近いと考える。米屋が居所である日本橋木原店で仕出屋商いをしていたと推測する根拠は、通日雇研究の泰斗、藤村潤一郎氏の次のような指摘と付合するからに他ならない。藤村氏によれば、日本橋木原店は通日雇請負商人の集中（「上下の者、道中駕籠供の者等相雇候には、日本橋木原店に請負の者数多住居致候」<sup>13</sup>）する場所であり、同時に「木原店が旅宿兼料理屋としての面」を併せ持つという地域的特質を指摘している（藤村一九八三）。この指摘をうけとめつつ米屋の仕出御賄請負を解釈すると、日本橋木原店に居を構えた米屋田中家は、通日雇人足の請負業を行いながら、仕出屋もあわせて経営し、同時に武家の御賄人足の請負を行っていたと推測されるのである。米屋田中家は、木原店に仕出屋を構え、そこで調理に関する基本的な技術をもつ手代層（第三章で言及する新兵衛・兼次郎・寅次郎・徳次郎といった存在を想定）を育てることで、より規模の大きい伝奏御賄方料理人足を請け負う力量をもった請負商人へと発展することができたのではないだろうか。

時代はやや下った天明期の江戸の町方に武家の仕出需要を満たす仕出屋が普及していたことを示す根拠を次に提示する。

【史料9】

弁当を持来るに、寒中には冷、夏はあざれてくさくなるに付て、後は内々一組申合て、仕出しやに惣弁当を申付て、一汁一菜の膳を持参して、請負ひたるものふるまひたり、追々、諸組、諸役ともに、泊りのある場所は皆仕出しに申付たり、世話心遣もなく能ことなりけり、翁御徒頭被仰付たる時は、御改正後なりつれど、いまだ仕出しは不止して、御徒士

頭部屋にて、師匠番の御差図にて、一汁一菜のめしを振舞ひたり、至極勝手にばかりしなり、御徒頭の請負を清水屋云たり、白川侯執政せられて御改正ありしより、次第次第にかゝる事止たり<sup>14</sup>

これは森山孝盛が著した「賤のをだ巻」の一節である。森山によれば幕臣達の弁当、夜食、番人などの都度に行われる儀礼的な振舞などで必要とされる食膳を江戸市中の仕出屋へ発注することが増えていたことがわかる。背景には江戸城という宮廷社会における幕臣達の複雑な人間関係があったのであるが、仕出屋が幕臣達にその便利さで支持され、それによってそれを請け負う清水屋のような商人が登場してくる事情が克明に描かれており興味深い。江戸には、こうした幕臣達の弁当需要ばかりでなく、様々な仕出・御賄需要が広汎に存在していた。後の米屋が家業の柱とする江戸城門番人足の請負も、江戸城の城門の番人足を請け負うと同時に、番所に住み込む番人足へ食事や風呂を提供する御賄が含まれていた(市川二〇〇八)。参向公家衆の御馳走役以外にも武家社会を中心に実に多くの料理方人足の需要が形成されていたのであり、その需要の担い手として町料理人という人足が誕生しており、それらを束ねて規模の大きい料理人足需要を請け負っていたのが米屋田中家であった可能性が高い。

延享二年(一七四五)の仕出御賄請負段階の米屋田中家も、ここに描かれた武家の小規模な仕出需要を請負ながら、一方で木原店の飲食街の一部を構成する仕出屋として営業をしていたのではないかと推測したが、「よしの冊子」寛政二年(一七九〇)の記事に「伝奏之事、万事受合候町人、牛込二有之、是も右計にて暮し居り」<sup>15</sup>という記述があり、寛政期には伝奏御賄の請負だけで生計をたてる商人が牛込に存在していたことが知られる(田中一九九七)。延享二年の米屋はすでに仕出御賄請負商人として営業をしており、毎年参向する公家衆への御賄需要を積

極的に受注しようと営業活動を展開していた。米屋の経営にとって毎年安定して発注される伝奏御賄は重要な受注目標であったのであり、そうした営業努力と実際に請け負った経験知を蓄積しながら、米屋田中家は次第に成長を遂げ、やがて伝奏屋敷での参向公家衆への御賄を毎年請け負う力量をもった請負商人へと成長していったのではないだろうか。

延享二年の米屋田中家の事例は、米屋田中家の公家衆御馳走役の請負事例の初見であるばかりでなく、管見の限り、参向公家衆御馳走役を商人が請け負っていたことを示す初見史料でもある。参向公家衆の御馳走役が大名によって担われていた元禄期から延享二年までの約五〇年間に大名から御馳走役を請け負う商人が徐々に成長していったのであり、その一事例として米屋の成長・発展を位置づけることができるのである。

## (2) 参向公家御馳走仕法改革の起点 安永九年の現状調査

本節では、安永九年(一七八〇)に実施された参向公家衆の御馳走役の実施調査、寛政二年に具体化された参向公家衆御馳走仕法改革の実態を考察する。

### 1) 仕法改革の発端 冗費削減

安永九年七月二八日、老中首座松平輝高は、町奉行牧野大隅守成賢・曲淵甲斐守景漸に対して参向公家衆の御馳走にともなつて発生していた冗費削減について次のように指示した。

### 【史料10】

公家衆御馳走被仰付候面々、御馳走之事二候得ハ麤末之儀無之様可致儀勿論之事二候得共、近来無益之入用等有之趣相聞候、以来、左様之儀無之様、京都え相達候二付、御馳走人高家えも別紙之通相達候、右用向相達候町人共も、御馳走御用二乗し過分之人用相掛ケ候趣相聞候<sup>16</sup>

御馳走の対象が勅使という当該社会における最高の政治的なステータスであったことを考慮すれば、御馳走に要する経費が高額に達することはある程度不可避であった。したがって「麤末儀無之様可致」を前提とする限り、経費削減の方法を具体的に指示しなければ、仕法改革の成果をあげることは困難であったに相違ない。そのため幕府は、具体的な指示をするうえで必要な実態調査を実施している。幕府が経費の高騰を問題視していたのは、その経費が「右用向相達候町人共も御馳走御用ニ乗し過分之入用相掛ケ候趣相聞候」とあるように、御馳走役大名のもとで実務を取り扱う請負商人が介在し、それら請負商人がややもすれば削減しづらい貴賓への御馳走という特性に乗じて、冗費の温床が形成されていたのである。

留意すべきは、老中松平輝高の問題認識では、商人請負そのものを弊害としていた訳ではないという点である。「商売牀之儀ニ候得は、相応之助成は有之事ニ候得共、以来不相応之儀無之様可被申付候」とあるように商人による相応の利益は否定されていないのである。では何が「不相応之儀」として問題視されているのだろうか。「公家衆家来え請負人共より直ニ懸合候儀も有之」とあるように、公家衆が江戸に逗留中「品々懸合候儀」、すなわち様々な要望を御馳走役に持ち込むのであるが、公家衆の要望はそのまま御馳走役大名から請負商人へと丸投げされていた状況が想定されていた。そうした御馳走役大名からのチェックが効かない状況が常態化すると、請負商人は自らの営利のために直接公家衆へ働きかけ、様々な要望を誘発するようになったという。老中松平輝高が「無益之入用等不相掛様可致」と下命したのはこうした請負商人の不相応の営利行為であった。

#### ロ 商人請負の実態

参向公家衆に提供された各種の御馳走は、どの程度まで商人が関与していたのであろうか。幸いにも安永九年（一七八〇）の場合は、御馳

【表1】公家衆御馳走大名の請負内容（安永8年・1790）

区分	記号	内 容	摘 要
① 食系	a	両卿料理向、客前・中通・下部迄、賄方一式	両卿之分は御馳走附役人相改毒味 下通は請負人え為取計候
	b	両卿・中通・下部 外勤弁当一式	
	c	両卿・中通・下部 逗留中菓子一式 進物品々共	御馳走附役人え請負人二品々為差出、 改候上請負人より為納
② 住系	d	両卿風呂・諸道具供之人数居風呂等一式	役人相改、其外は請負人え為取計候
	e	白木具道具一式	役人相改、請負人より為納候
	f	茶器類一式	請負人より差出
	g	屏風一式	請負人より差出
③ 衣系	h	夜具・木綿合羽・浴衣・油単・蒲団・高張提灯・紙荷印	損料。多分紛失之由にて不相返。 青士以下は仕切金
④ 行列系	i	輿・挟箱・長持・桐油・御供合羽	青士以下は金子にて仕切
	j	逗留中乗物一式・貸駕籠等諸品之分	請負人より差出
	k	帰路之節荷物包立、提灯張替	請負人より差出
文⑤ 系注	l	両卿用人近習書記迄有用物并調物請負、 日々注文之、不時入用之品、金子にて仕切	金子にて仕切

※（『東京市史稿 産業篇 27』188 頁（「安永撰要類集四」）より作成。

【表2】勅使一行の職層構成

職 層		人 数
勅 使	雑 掌	2
	用 人	(1)
	近 習	(1)
	医 師	6
	青 士	(1)
中通り	小 頭	5
	下 部	2
下部	下 部	28
	計	(46)

※濱田・林 (1989) より作成。

走体制の改革案をつくるための基礎作業として請負の実態調査が行われ、そこから興味深い実態が浮かび上がってくる。

まず御馳走役大名の請負金額について次のようにある。「一鉢之入用、大名高凡五万

石程にて金八九千両より一万両余二及」、すなわち御馳走役大名の負担が、五万石程度の大名で金一万両にも達していた実態が確認される。参向公家衆御馳走役に任命された大名の加重な負担実態といえよう。

【表1】は、参向公家衆の御馳走役大名が請け負った業務を一覧するとともに請負商人がそれらの業務にどのように関与したのか、その実態を調査した結果を一覧したものである。ここに一覧された請負商人の関与実態を正確に理解するために、まず勅使一行の家臣団構成を確認しておきたい。【表2】は、勅使二行の構成員を一覧したものである。これによれば、勅使一行は、トップの勅使(二人)、雑掌・用人・近習・医師・青士<sup>17</sup>からなる中通り(一四名程度)、下部(小頭を含む三〇人程度)、以上の三階層・約五〇人から構成されていた。

こうした規模をもつ勅使一行への御馳走は、大きく①食系(a料理・御膳方一式、b弁当一式、c菓子・進物品々)、②住系(d風呂等一式、e白木道具一式、f茶器類一式、g屏風一式)、③衣系(h夜具・浴衣・合羽・油単・蒲団・提灯等)、④行列系(i輿・挟箱・長持・合羽、j乗物・駕籠、k帰路荷物包立・提灯張替)、⑤注文系(1日々注文品)、の五つに分類された。

①食系をみると、aは伝奏屋敷内での三度の食事、bは江戸城や増上寺・寛永寺など、勅使一行が外出した際に、中通り以下の家臣団の食べ

る分、cは伝奏屋敷逗留中に来訪した客人へ提供されたものが中心となっていた。興味深いのは、勅使への食膳提供にあたって必要となった毒味は、「両卿之分は御馳走附役人相改毒味いたし差出、下通は請負人え為取計候」とあり、幕府が直接毒味を実施したのは勅使だけであり、勅使に随行した家臣団への毒味は請負商人任せになっていた。幕府の責任範囲は勅使に限定されていたといえよう。また②住系の進物・風呂・装飾品(白木道具・茶器類・屏風類)は、請負商人が準備・納品し、役人がその出来上がりだけをチェックしていたことがわかる。

③衣系をみると、伝奏屋敷逗留中の夜具・浴衣などの衣類は、現物をレンタルして支給していたことがわかる。それらのレンタル品は「多分紛失之由にて不相返、其分買上ニ相成候由」とあり、請負商人が損料商人へ弁償していた。史料には明記されていないが、その負担分は最終的には御馳走役大名の負担に帰していたと思われる。より身分の低い青士以下については、こうしたレンタル物品の紛失を織り込んでか、当初から仕切金の支給で現物支給に代えていた。

④行列系をみると勅使への御馳走は、品川宿(送迎)と伝奏屋敷間、伝奏屋敷と江戸城の間で行列を組んで移動するために必要な人足や装束なども含まれていたことがわかる。これらについても青士以下については仕切金が支給されており、自前調達を原則としたが、実際には省略して実収入にしていたと思われる。

全体としてこれらの請負商人は「入札之上請負え申付」とあるように御馳走役を命じられた大名が入札を実施したうえで請負商人を決定していたことがわかる。その請負金額が高額に達したのは、細々とした準備を一括して請け負わせていたからであり、それ故に経験知に劣る大名にとって請負商人は便利な存在であった。必要な準備を御馳走役大名だけで整えようとすれば、菓子はどの菓子を選ぶのか、進物はどんなものを贈ればよいのか、茶器や屏風についても全く同様であったはずである。

このように煩瑣な準備を万端整えるのに請負商人は実に都合のよい存在であった。しかしその便利さ故に経費が高む可能性が秘められていた。<sup>5</sup>注文系は、勅使や家臣団が日々所望する物品を調達する役割のことであった。事前に準備しなければならない物品も細々と規定されていたが、「日々渡物之外品々注文を以申聞」とあり、その仕組みが次第にエスカレートし、「家司末々二至、無益之好物有之候由二付、多分之仕切金等別段二差出候故、自ラ不相当之入用二相成、御馳走方甚困難二相成候由」とあり、家臣団のネダリ行為などにより仕切金の追加負担が発生し、御馳走役の加重な負担となっていた実態がわかる。

勅使一行のネダリ行為の横行には仕切金の支給によって請負金に上限を設定するという対策が講じられているのであるが、その背景には勅使一行からの要望は断りきれないという御馳走役大名の弱い立場があったことは言うまでもない。大名にとって御馳走役は勅使一行への饗応のようにはみえながら、その本質は幕府への奉公に他ならず、御馳走役の配慮が大きかったことは【史料1】でみた通りである。請負商人はこうした御馳走のあり方を逆手にとって「公家衆家来え請負人共より直二懸合候儀も有之由二候間、是等之儀は猶以嚴重二申談、無益之入用等不相掛様可致」とあるように、請負商人が直接公家衆へ働きかけ、無用の品を注文させることで自らの請負金高をつり上げようとする不正行為を働くようになっていたのである。

安永九年（一七八〇）段階で現物の支給から仕切金の支給で対応するようになっていたのは、こうしたネダリ行為にも近い不正行為に一定の歯止めをかけるため、勅使一行の注文機会を減らし、負担額に一定の上限を設けるため、仕切金を支給する制度の導入をはかったのである。こうした仕切金の支給は、寛政二年の仕法改革の際に、さらに普及することになる。

勅使側と請負商人の結託が、結果的に高い請負金になって御馳走役大

名の支出を増額する結果となっていたとなると、それを防止するために、いかにして不正に手を染めない商人を選ぶのが課題となってくる。当時、請負商人は入札によって決定していたことがわかり興味深い。しかし参向公家衆の御馳走役の請負の入札は「入札は吟味致候得共、是迄致し馴候もの二無之候ては、間違之程無覚束、多分年々同しもの引受為相勤」とあるように、請負業務の特殊性故に、不慣れた商人ではどのような失態を犯すかはかりがたく、これを忌避しようとするあまり、いつも同じ商人が落札しても同じ請負商人に安心して丸投げできることをかえって好都合とし、その結果、入札の形骸化が何ら問題視されることはなかった。入札は行われていたが、実質上機能不全に陥っていたのである。

前節で検討したように、商人が参向公家衆御馳走役を請け負うようになっていたことが初めて確認されたのは、米屋田中家文書の延享二年「記録」においてであった。それから四〇年余りが経過した安永期、御馳走役大名は請負商人に業務の大半を任せ、過度に依存するようになっていた。御馳走役大名は毎年かわっても、これを請け負う商人は毎年かわらなくなっていたのである。しかしこうした実態は、大名にとって決して不都合なことではなかった。こうして享保期以降徐々に請負商人の関与が進み、安永期には請負商人への過度な依存が問題視される段階へ到達していたといえよう。

老中松平耀高は、二年後の天明元年、在職中に急逝したこともあってか、田沼政権下で問題視された請負商人規制の問題意識は具体的な政策となつて展開した形跡がみられない。あるいは田沼意次の失脚と関係があったのかもしれない。史実は今後の研究の進展を俟つかないが、このときの問題意識が実際の具体的な改革案として浮上するのは、松平定信が主導した寛政改革開始間もない寛政二年（一七九〇）一〇月のことであつた。天明七年（一七八七）に定信が老中首座に登り詰め幕政の主

導権を掌握してからわずか三年後ことであるから、実務レベルでは田沼時代の改革案が保持されていたのかもしれない。安永九年（一七八〇）段階で浮き彫りとなった弊害への対応は、田沼失脚後に政権を掌握した松平定信による寛政改革の一環として実際されることになる。

（3）寛政度の参向公家御馳走仕法改革

寛政三年（一七九一）正月一六日、参向公家衆（勅使・院使）の御馳走役大名として秋月山城守、池田山城守が例年のおり任命された。しかし、例年と違うのは、その前年の寛政二年（一七九〇）一〇月に決定した「御馳走仕法改正一件書」が提示され、前年とは全く異なる役割を果たすことを命じられた点である。

寛政二年に決定し、翌寛政三年に実施された参向公家衆御馳走仕法改革の概要を列記すると以下の通りである。

イ) 贈物改革（贈与物の定量化）

ロ) 御贈改革

① 御贈主体の変更（大名から代官へ）

② 御取替金の支給

③ 御贈の定量化

④ 御贈の省略・簡略化

⑤ 不正防止・規律化

以下、この順に寛政度の参向公家衆御馳走仕法改革の概要をみてみよう。

イ) 贈物改革

江戸に参向する公家衆への贈物の献上は、御馳走役大名にとって経験知を必要とする重要な儀礼であった。贈物をいつ、どのように献上するかは政治儀礼そのものであり、前例をしっかりと把握していなければ

【表3】勅使への御贈物

場 面	太刀	金馬代	鮮鯛	干鯛	昆布	樟	白銀	蠟燭	干菓子	粕漬鮑	生花	名酒	搗栗	砂糖漬	桑酒	枝柿	檜重
①.両卿江戸表着	1腰	○															
②.上使相済候節			1折														
③.御対顔相済候節				1箱	1箱	1荷											
④.御饗応御能後				1箱													
⑤.御返答後			1折														
⑥.両卿発駕前日				1箱			10枚	2箱									
⑦.発駕後戸塚駅にて									1箱	1桶							
⑧.逗留中時々贈											○	○	○	○	○	○	○
⑨.両卿への院使御馳走 大名初挨拶	1腰	銀馬代															

雑掌・用人への御贈物

場 面	雑 掌	用 人
イ) 江戸到着時	金300疋	金200疋
ロ) 両卿登城後	銀3枚	銀2枚
ハ) 発駕前日	金500疋	金300疋

※『市史稿 産27』318頁より

ならない。そのうえで何を贈るのかも配慮を要したはずである。請負商人への依存が進んでいた仕法改革前の安永九年（一七八〇）段階では、勅使への贈物は請負人が手配するようになっており、御馳走人大名の役割は献上する事だけとなっていた。これに対して、寛政二年の改革仕法ではどのような変化があったのだろうか。【表3】は寛政二年（一七九〇）に決められ「勅使両卿并雑掌以下下部迄、大名より贈物之仕形」を一覧したものである。ここでのポイントは、御馳走役大名が行うべき贈物のタイミング、品物などが具体的に明文化された点である。【表3】の内容をみてみると、まず献上の対象が勅使向けと雑掌用人向けの二つに峻別され、しかもそれぞれ回数と内容が具体化されている。雑掌・用人は貨幣を三回に渡って献上することになった。勅使に対しては、計九回にわたって贈り物が献上され、そのタイミングがよくわかる。①江戸着↓②上使（將軍の使者）接遇後↓③將軍との対面後↓④饗応能の後↓⑤対顔の御礼後↓⑥江戸発駕前日↓⑦戸塚駅にて↓⑧江戸逗留中の公家衆の来客に対する下賜物として、⑨院使付きの御馳走大名が初めて勅使と対面した時（院使がいる時のみ）、計九回、しかもその都度何を送るのが明記された。このような贈物の定量化・客観化は、数年あるいは十数年に一度しか御馳走役をつとめない大名にとって大きな負担削減になったに相違ない。

また次節で詳説するように、仕法改革の意図は、御馳走役大名の負担軽減であった。この仕法改革によって御馳走役大名の役割は贈物の献上だけに限定されることになり、その負担は全体としてかなり削減されることになった。

#### ロ) 御賄改革

##### ① 御賄主体の変更（大名から代官へ）

寛政二年に治定した御馳走仕法改革の諸項目のうち中核的な改革項目はこの御賄改革であった。

#### 【史料11】

右御馳走人え被仰渡候趣、公家衆参向御馳走被仰付候得共、是迄御賄向一式共二引請被相勤候、此度御改正被仰出、公家衆并雑掌以下下部二迄迄御手当金被下、后後御馳走人は公家衆発足逗留中登城外出之節警固、於殿中之掛引、御三家方或は上使等有之候節取計方迄二候、御賄向一式は御代官え被仰付、其外は御取替金可被成下候間、右御取替金は御馳走相済候後可被致上納候、且又御賄方二付雑掌・用人等え之対応は、御勘定組頭・御勘定方引請取扱、都て之儀は御目付方并町与力同心立合候様ニ申渡、尤登城外出之節は前々之通可被相心得候、委細之儀は高家御勘定奉行可被談候

右之通御馳走人え被仰渡候、以上

亥正月<sup>18</sup>

ここには寛政二年（一七九〇）における参向公家衆御馳走体制の改革概要が集約されている。これによれば、寛政以前御馳走人大名によって一手請けされていた伝奏屋敷における御賄役が、寛政以降は「御賄向一式は御代官え被仰付」、あるいは「此度御馳走方御賄向仕法御改正被仰出候、御馳走大名は是迄之通被仰付候得共、御賄一式於公儀御取賄有之」、「御馳走役大名は前々之通被仰付候得共、都て御賄向は御入用を以御代官御賄二成」とあるように参向公家衆の江戸滞在中の賄は、御馳走役大名に代って幕府代官が担うこととなり、その経費は幕府が負担することになったのである。

この改革にともなう御馳走大名の役割は「御馳走方大名前々之通被仰付候得共、右は公家衆着・出立逗留中外出之節之警固、登城之砌於殿中掛引、其外御三家方或は上使等有之節之取計方迄二」とあり、新たな御馳走大名の役割は、①公家衆発足逗留中登城外出之節警固、②於殿中之掛引、③御三家方或は上使等有之候節取計、の三項目と先にみた贈

物の献上に限定され、御賄関係の負担が除外されることによって、御馳走大名の負担は大幅に削減されることになった。

こうした改革が行われた背景には、安永九年（一七八〇）段階における現状把握、すなわち御馳走役大名の実務への不慣れが請負商人への依存をもたらししていたという反省があり、参向公家衆御馳走仕法改革は、こうした反省が活かされた結果であることは次の史料からも明らかである。

#### 【史料12】

以来公儀御賄被仰付候儀、畢竟是迄御馳走之大名年々不案内之 面々而已相勤、万端不事馴所より彼是危踏、諸事手重ニ相成、自ラ無益之失費不少、難義之事たるを以、御改正有之事に候<sup>19</sup>

すなわち旧制度における御馳走役の担当は、毎年異なる大名であったのに対して、寛政三年（一七九一）の改革後は御馳走役の中核部分であった御賄向を幕府の官僚機構が毎年担当することになったのである。御馳走役を実施する窓口が固定化されたことにより、様々なノウハウが幕府官僚機構に蓄積されることになったことの意義は大きい。

また寛政度の御馳走役改革の根底に流れていたのは、田沼政権下にあった安永九年（一七八〇）の頃と変わらず、冗費の削減であった。「賄向之儀是迄御馳走大名御賄相勤候振合ニ准シ、膳部省略之上差出」とあるように、大名が御馳走役を担う限り、大名の名誉感情に照らして御賄のレベルを下げるのは難しかったのであろう。御賄の実務の担い手を格式の高い大名から身分的には下位の幕府代官へと変更した理由のひとつはここにあった。

御賄の担当は大名から代官に変更になったが、御賄の全てが代官に移管されたわけではない。

#### 【史料13】

御賄向一式御代官え被仰渡、都て用向対応之儀は、雑掌以下青士迄は御勘定方え懸合、小頭以下下部共申聞度筋は、御普請役え可申聞候、尤其度々御勘定方・御徒目付・御普請役えは、御小人目付立合談之趣承届候

すなわち御馳走役の中核である御賄の提供に関する部分は全て代官に移管されたが、雑掌以下から寄せられる様々な要望などの取次ぎは、中通りは御勘定、下部は御普請役が受け付け、さらにそこに御小人目付が立ち会うという監察体制を新たに構築した。公家衆の要望が、御賄を主に担当する代官へ直接いかないように、御賄の実務担当と要望をうける窓口とを分離したのである。御賄の提供と要望の受付が別々の役職によって分課され、適正な執行をチェックする体制が取り入れられた意義は大きい。こうして公家衆に対する御賄の提供は幕府の官僚機構を活用することで、毎年の経験知は官僚機構に蓄積されるばかりでなく、ややもすれば請負商人と参向公家衆の間で起こる不明瞭な癒着を排除する監察体制が構築されることとなった。寛政三年（一七九一）の制度改革は、大名から代官へという単なる担当部署の転換でなかったのである。

#### ② 御取替金の支給

御賄の請負主体が大名から代官へと変更された事は、非常に大きな変化であったが、代官請負とセットになって導入された取替金も注目すべき改革であった。

安永九年（一七八〇）の実態調査でも明らかにように参向公家衆への御馳走には、衣食住の各分野にそった様々な饗応が行われ、それに必要な物品は請負商人が調達していた。また日々勅使一行からの注文に対応するための仕切金は請負商人から支払われていた（【表1】参照）。これらは全て請負商人によって賄われ、その財源はすべて御馳走大名からの請負金であった。御賄に要する経費が多ければ多いほど請負商人の売上

【表4】御取替金一覧

職 層	金 額
両 卿	金 300 両／人
雑 掌	金 10 両／人
用 人	金 8 両／人
近習・医師	金 6 両／人
青 士	金 5 両／人
小 頭	金 3 両／人
下 部	金 2 両／人

※『市史稿 産 27』325 頁より

が増える構造こそ請負商人が不正を働く動機を温存する仕組みになっていた。そうした弊害を回避するため、必要に応じて必要な額を支払うのではなく、予め決まった額を設定して毎年同じ額を支払うことになった。こうした改革

が必要となった背景には、一つには貸し出した品物の紛失があった。「右夜具は緞子以下丹後海気郡内絹木綿等之分共損料物ニ候処、多分紛失之由にて不相返、其分買上ニ相成候由」とあるように、本来レンタル物資であった夜具類が勅使一行へと貸し出されると、その多くが紛失してしまい、結果的に御馳走役大名の損害になっていた。あるいは日々必要な物資を要求に応じて提供する「日渡物」というサービスを行ってきたが、これについて改革以前と以後の違いを次のように述べている。「大名御賄相勤候節は、日渡物と唱請取候品、并外出之節其度々ニ木綿合羽はき物等迄請取候由ニ候得共、此度仕法御改正之上、公儀御賄ニ成り、殊ニ下部迄召連候手当金も被下置候儀ニ付、是迄仕来ニ泥ミ、前書日渡物等不相渡候得は、差支候様申立候共不取用」。すなわち大名が御馳走役を一手に勤めていた時代には、公家衆が必要とするものはその都度請求していたが、寛政度の改革によって物品から奉公人給金まで含めた広範な手当金（取替金）が、公儀から支給されるようになり、結果その都度の請求は出来なくなったのである。【表4】は寛政度の改革によって導入された取替金を一覧したものである。勅使についていえば、「両卿往返道中并江戸逗留中、其外御賄向御省略ニ付、一式為御手当一方え金三百両宛相渡候間、逗留中雑掌人手形を以、御金蔵より可受取之事」とあり、往復の道中、江戸滞在中の経費として一人三〇〇両が支給されていた。

【表5】寛政2年10月の仕法改における御賄規定

階層	場 面	三汁十一菜	三汁九菜	二汁五菜	一汁三菜
勅 使	江戸着	◎			
	逗留中		○		
	江戸発足	◎			
雑掌／青士	江戸着		○		
	逗留中			○	
	江戸発足		○		
小頭・下部	江戸着				
	逗留中				○
	江戸発足				

※『市史稿 産 27』323 頁より。◎は御雑煮付き

こうした取替金の総額は、【表2】の人数で計算すると金七四七両となった。

③ 御賄の定量化

勅使の一行は、武家伝奏が勤めた勅使を頂点として、雑掌から下部まで様々なレベルの公家（中通り）とその従者（下部）から構成されていた。勅使一行に提供された御賄は、その階層に応じて異なっていた。御賄のレベルを決める要素は階層だけではない。御賄は品川宿に到着してから品川宿を発駕するまでの間に行われる様々な儀礼の種類と階層に応じて変化し、全体として複雑な御賄構成であったが、それらの概要を示したのが【表5】である。勅使の日常食は三汁九菜、雑掌／青士（中通り）の日常食は二汁五菜、下部の日常食は一汁三菜であった。勅使と中通りは儀礼のレベルに対応して提供される御賄のレベルが変化したが、下部

は儀礼に関係なく一汁三菜であった。

#### ④ 御賄の省略・簡略化

勅使へ提供された食事は勅使自身の政治的なステイタスからして、これを大きく省略することは困難であった。これに対して、中通り・下部に対する御賄は前例にとらわれず省略へと舵を切っている。たとえば「餅菓子薄茶計り出し、警時刻移り如何様ニ申聞候共、膳部一切差出申候事」とあるのは、来客の滞在時間がいくら長引いて食事時に及んでもけっして食事は提供しない、とするものである。もしも雑掌・青士が、自らの来客に対して食事の提供を求める場合、前日までに、「懸り高家に申立、其後御勘定奉行え断有之候得は、一汁五菜之御賄、主人え計被下候」とあり、許可を得ても一汁五菜の質素な食事とし、茶・菓子の提供はなく、来客の家来には何も提供されない決まりになっていた。また小頭層の来客は「所縁之者罷越候共、湯茶之外御賄等は一切不被下候」とあり湯茶のみの提供しか許可されなかった。

こうして詳細に規定をみると、仕法改革以前は、どこまでが御賄の対象者であったのか、甚だ曖昧であったことがリアルに伝わってくる。恐らくは、公家衆の求めを断り切れずに、求められるがまま御賄が提供されていたのであろう。こうした不明瞭さが勅使一行のネダリ行為の原因となっていたのである。

#### ⑤ 不正防止・規律化

最後に勅使に随行した中通り・下部の不正行為の防止に関する対策についてみておきたい。

まず伝奏屋敷逗留中の中通り以下の随行員の外出についての規定を試みたい。

#### 【史料14】

逗留中門出入之儀、自分用は勿論、警主用にて致外出候者共、長持・挟

箱・風呂敷包、都て右類之品持出候節は、通門にて御小人目付・町同心悉改を受可罷通候

家臣団が伝奏屋敷から外出する際には、たとえ主の命であっても長持・挟箱ばかりでなく風呂敷まで、その中身を御小人目付・町奉行同心のチェックを受けなければならなかった。こうした制度の目的がどこにあったのか、現段階では明らかにすることはできない。今後の研究の進展に俟ちたい<sup>20</sup>。

次に下部の御賄についての規定をみてみたい。

#### 【史料15】

一、逗留中小頭以下下部迄御賄被下候儀、朝は六時より五時迄、昼は九時より八時迄、夕は七時より暮六時迄、人数廿人迄は勝手次第席え罷出可致支度、其節大勢申合、猥之儀有之候ハ、召捕、追て致吟味候事、

但、小頭以下下部共病氣にて出席難相成候は、病氣見分之上、居小屋え引膳ニいたし、役人附居食事為致候、勿論病氣之段は、雑掌より御勘定方え断無之候ては引膳いたし候儀難相成候、且又病氣之趣申立候得は、直ニ医師差遣相尋ルニて可有之候ニ付、其段兼て下部共心得違無之様ニ申渡可有之候事

この規定は、約三〇人に及ぶ小頭以下の下部の御賄に関するもので、こうした規定の存在は、伝奏屋敷内の実態を垣間見るうえで実に興味深い。これによれば、小頭層の食事スペースは二〇名規模に過ぎず、下部層全員が同時に食事を始める前提ではつくられていなかったことがわかる。下部層が一度に食事場へ集中すると食事の提供に遅滞が生じるからであろうか、「大勢申合、猥之儀有之候ハ、」とあるように、ややもすれば「猥り」な行動をとる者も存在したようで、恐らくは集団的な示

【表6】寛政度の参向公家衆御馳走役の仕法改革概要

改革前	改革後
御馳走人大名の一手請 ↓ 請負商人への依存	御賄→御代官・御勘定・御普請・御小人目付 御取替金→公儀負担 贈物、警固・殿中掛引・上使等取計→御馳走人大名

威行爲、例えば一斉に罵声を発する状況が生まれていたのであろう。また病氣と称して「居小屋」に籠もり、食事だけ運ばせ、勤めを果たさない不法行爲が横行していたと推認され、対応策として医師の診断を義務づけたり、雑掌を通じた申告を義務づけたりする工夫が凝らされていた。

こうした事実から勅使の一行でありながらも、その最下層の小頭層が武家奉公人と同様給金の取得を目的とした出替奉公人であったことがわかる。小頭層がどのように充足されたのか、詳細は未詳ながら、短期間の雇用期間に限った人足を徴募した出替奉公人に依存せざるを得ない状況は江戸の武士と同様であったものと思われる。

以上、寛政二年の参向公家衆御馳走仕法改革について、その概要を述べて来た。その内容は【表6】のように整理される。これにより、これまでほとんどその実態がわからなかった参

向公家衆の御馳走役とその仕法改革全体像を、かなり解明することが出来た。

#### （4）残された課題と御賄の原資と商人請負

安永九年（一七八〇）に構想された参向公家衆御馳走仕法改革は、寛政二年（一七九〇）に結実し、翌寛政三年（一七九一）から直ちに実施された。この仕法改革の端緒は請負商人への過度な依存に端を発する冗費の発生をどのように防ぐのか、という問題意識が根本にあった。この

仕法改革により、それまで御馳走役の全てを担ってきた大名は、新たにその役割を公家衆に対する贈物の贈与・警固・殿中掛・上使等取扱に限定され、最も加重的負担を伴う伝奏屋敷における御賄は、代官が担当する新しい体制へと変更された。この仕法改革によってある程度、改革の目的は達成されたと思われるのであるが、伝奏御賄の商人請負を禁止する条項は確認されなかった。寛政期の関連史料を読む限り、幕府が請負商人の存在を容認したのか、禁止したのか判然としない。しかし、御賄の実務は多くの人足の動員を伴うもので、それらの人足を直接の担当となった代官、あるいは代官が所属する勘定所機構のなかで拠出していた痕跡はない。この点から考えれば、寛政度の仕法改革は商人による請負を前提としたものであったとみるべきであろう。またこれまで大名が負担してきた一万両もの経費は公儀賄となった。したがって、もしも商人請負が継続していたとすれば、請負商人への支払い、公儀から拠出されることになった。その際、幕府の新たな負担を、それまでの負担から解放された大名から補完する仕組みがなければ、金一万両にもなんなんとする莫大な経費は、純粋に幕府の支出増に帰したことになる。現段階では、大名から幕府への御馳走役の代銀納のような財政的補填の事実確認されていない。幕府と藩の双方を見据えた参向公家衆の御馳走仕法の制度史研究の進展に俟ちたい。

#### 三、嘉永二年における伝奏御賄方料理人足の請負実態

寛政度における参向公家衆御馳走仕法改革は、それまでの御馳走役大名による請負体制から御馳走役大名と代官を中心とする幕府役人によって分担される請負体制への転換をもたらした。この制度改革によってコスト高騰の原因とされていた請負商人も、それまでの関わり方の変更を余儀なくされたはずであるが、詳細な請負記録は現在のところ見つから

ていない。その意味では、本稿が分析の対象とする嘉永二年（一八四九）の伝奏御賄向人足の請負商人の経営帳簿分析は、寛政二年の改革から約五〇年を経た時期であるが、その実証的な価値は決して小さくはない。そこで本章では、米屋田中家がどのように伝奏御賄向人足を請け負ったのか、その実態を実証的に掘り起こすことを課題としたい。

（１）分析対象

今回分析の対象とするのは、米屋田中家文書のうち最も古い年紀をもつ嘉永二年の伝奏御賄関係文書である。嘉永二年の伝奏御賄関係文書分析の俎上に載せるのは、最も古い年紀をもつばかりでなく、史料の残存状況が良好な点も重要である。嘉永二年の伝奏御賄関係文書がどれほど良好な残存状況にあるのか、嘉永七年（一八五四）に成立した米屋田中家所蔵の経営帳簿リストである「歳々記」の記載と比較してみたい。「歳々記」の伝奏御賄の嘉永二年の条には次のようにある。

【史料16】

嘉永二酉年二月 二月廿五日御先着之所川支ニ而二月廿七日御先着、三月七日発興  
一、右同断（御賄向働人足御勘定帳、筆者注） 五冊<sup>21</sup>

「歳々記」が成立したのは嘉永七年の五年前の嘉永二年である。この段階で存在が確認された経営帳簿が五冊であるから、この五年間での関係文書の散逸は考え難い。したがって現存の古文書点数六点は、嘉永二年（一八四九）の伝奏御賄を請け負う際に作成された文書をほぼ網羅しているものとみて大過ない。

【表7】は、嘉永二年の伝奏御賄関係文書を一覧したものである。この帳簿A～帳簿Fの帳簿の内容をみると、帳簿Aには帳簿Cと帳簿Eの

同じ内容が書写され、帳簿Bには帳簿Cと帳簿Fが書写されており、帳簿Aと帳簿Bは複合的な帳簿であることがわかる。そこで本稿では、この帳簿Aと帳簿Bを取り上げ紹介し、その後に釈文を付していくことにする。

本稿が分析・紹介の対象とした帳簿A「御参向御逗留中諸用控」及び帳簿B「御膳所御料理方働人足御勘定仕上帳并諸雑用」は、複数の経営文書を書き留めた基本帳簿で、その内容は多岐にわたる複雑な構成をもっている。そこで帳簿の構成要素ごとに番号を付し見出しをつけた。帳簿Aは①～⑬、帳簿Bは⑭～⑱から構成される。以下、この順にその注目すべき内容を摘出していく。

- 帳簿A「御参向御逗留中諸用控」
- ① 【御馳走体制】
  - ② 【御参向御料理方働人足御注文帳写】
  - ③ 【食札早見】

【表7】 米屋田中家文書における嘉永2年伝奏御賄関係文書一覧

No.	ID	資料番号	資料名	作成者	作成年		金額	人数
1	A	88209105	御参向御逗留中諸用控	米屋直吉	(嘉永2年3月8日～)	正文		
2	B	88209101	御膳所御料理方働人足御勘定仕上帳并下諸雑用		(嘉永2年)	正文	惣売上高=105両3分2朱 惣払=金72両1分2朱	
4	C	88209103	御参向御料理方働人足御注文帳写		(嘉永2年)	写本	5貫317.6匁	2日分=116人 10日分=171人
5	D	88209104	御参向働人足給仕人下方申附帳		(嘉永2年)	写本		149人
3	E	88209102	御膳所中通働人足名前書上帳		(嘉永2年)	写本	一日=銀77.5匁 =金4両3分2朱456文	149人
6	F	88209100	食札取通	河内屋食座	嘉永2年閏4月23日	正文	1貫44.9匁=金17両12朱	

- ④【働人足名前書上】
- ⑤【人数割高】
- ⑥【心得之事】
- ⑦【御日割之控】
- ⑧【日記】
- ⑨【進物覚】
- ⑩【不足物】
- ⑪【食札代渡方】
- ⑫【内渡勤】
- ⑬【鑑札請取渡】
- 帳簿B「御膳所御料理方働人足御勘定仕上帳并下諸雑用」
- ⑭【御膳所中通働人足卯請負人数・賃銀】
- ⑮【働人足下払并諸雑用記】
- ⑯【食札渡方】
- ⑰【諸雑用方】
- ⑱【嘆願】

(2) 参向公家衆の滞在日程  
イ) 参向公家衆の構成

例年三月上旬に年頭祝儀の使者として参向する公家衆は、勅使二名であった。しかし嘉永二年（一八四九）は、その前年に孝明天皇の即位にともなう大嘗祭、後に英照皇后の女御宣下といった慶事が続き、二名の勅使の他に別勅使・女御使が派遣されることとなった。

【史料16】

関東江年頭之御祝儀  
勅使 三條大納言様

坊城前大納言様  
大掌会所御祝儀御使兼之  
女御使年頭之御祝儀勅使兼之  
入内御祝儀  
勅使 広橋大納言様  
女御使 堀川三位様  
帳簿Bの表紙には次のようにある。

【史料17】

勅使 三條大納言殿  
同御控同 坊城前大納言殿  
別勅使 広橋大納言殿  
女御使 堀川三位殿

これらから年頭祝儀の勅使としては三條実美の実父で嘉永元年に武家伝奏となった三條実方に加え、控勅使として前大納言坊城俊明が参向した。二人の勅使は伝奏屋敷中の壺ノ御殿を宛がわれた。別勅使としては広橋大納言（弘化二年に大納言に昇進した広橋光成）が式ノ御殿に宛がわれた。女御使（孝明天皇が即位した嘉永元年に入内、女御宣下を受け、後の英照皇后となる）としては堀川三位（天保四年に従三位に昇進した堀川康親一七九七〜一八五九）が参ノ御殿に宛がわれた。以上四名の公家衆とその御馳走役大名を一覧すると【表8】のとおりである。

【表8】 嘉永2年の勅使

区 分		理 由	使 者	御馳走役大名	滞 在
勅 使	定 式	年頭祝儀	三條大納言	田村右京太夫	壺ノ御殿
			坊城前大納言		
別勅使 女御使	非定式	大嘗祭所祝儀	広橋大納言	南部遠江守	式ノ御殿
		入内祝儀	堀川三位	松平淡路守	三ノ御殿

【表9】嘉永2年の予定と日々の記録

月	日		⑦【御 日 割】	⑧【日 記】
2月	13日	13日前	御殿内掃除之事	
	14日	12日前		
	16日	10日前	壱ノ御殿 御手水稽古之事	
	18日	8日前	弐・三ノ御殿 御手水稽古之事	
	19日	7日前	御内見分之事	
	21日	5日前	御清見分之事	
	22日	4日前	御殿内清掃除之事	御道具請取、進物上納
	23日	3日前		御道具請取、御膳所御掛え進物上納
	24日	2日前	品川宿出役之事	勘定奉行石川土佐守見分
			御普請役御代官手附手代引移之事	
			今夕より御賄被下候事	
			御勘定奉行御見分之事	
			御道具取錆之事	
			御馳走役人家来四五人引移之事	
	25日	1日前	御代官御勘定方引移之事	四ツ時、川支につき延着の回状到来
			御馳走大名并町方与力同心引移之事	
			雑掌・用人先着之事	
	26日	基準日	勅使・別勅使・女御使、御着輿之事	入込之儀伺ニ御掛御役人迄罷出
	27日		(先着)	入込
	28日			着輿(1日目)
	29日			(2日目)
	朔日			御対顔(3日目)
3月	2日			御能、(内渡金支給・4日目)
	3日			御三家御出(5日目)
	7日		(発輿)	(9日目)
	8日			御用済、引払

※帳簿A⑦⑧より作成

【表10】幕府方掛役人一覧

御掛御役人	御勘定組頭	成瀬藤右衛門	増御掛役人	御代官	小笠原信助
	御代官	大熊善太郎			吉田保太郎
		林部善太左衛門		御勘定	村井健三
		小田又七郎			松田仁三郎
					助太郎
	御勘定御吟味改役	小嶋仁内			小田直太郎
	御勘定	後藤隆太郎		御普請役見習	安藤三之丞
		土屋善九郎		同代り御金蔵同心	佐々木歙三
	吟味下役	榎本定蔵			林桃三九
	御普請役	桑山右源太			服部恵八郎
		森井普三郎	小笠原信助手代		白谷詮蔵
		林金蔵			中川要吉
	大熊善太郎手附	青木新左衛門		吉田保太郎手代	三枝寛五郎
		岡田正助			小田切正作
		綿貫庄左衛門			長沢八之助
		荒井汲平			
	林部善太左衛門手代	小田金次郎			
		内山左一郎			
		増田雄左衛門			
	小田又七郎手附	内海大作			
		大木欽蔵			

※帳簿A①より作成

口日程

⑦【御日割之控】・⑧【日記】

【表9】は、⑦【御日割之控】と⑧【日記】から作成したものである。これらはいずれも伝奏御賄を請け負う際のスケジュールに関する記録であるが、⑦【御日割之控】は「日割」ではなく「御日割」である点に注意を要する。すなわち⑦【御日割之控】は幕府側から示された公式日程の写であり、あくまで予定表である。これに対して⑧【日記】は米屋田中家側が日々作成した記録用の業務記録である。両者の違いを意識しながら業務日程をみてみたい。

⑦【御日割之控】の基準日となるのは「勅使・別勅使・女御使」が着興する二月二十六日であった。前日二五日に雑掌・用人が先着し、御馳走大名・幕府関係役人が伝奏屋敷に引き移り、さらにその前日二四日には、実務の中心になる代官の手代・手附が伝奏屋敷入し、勘定奉行の見分を受けることになっていた。準備の開始は一日前の二月一三日で、この日から御殿内の掃除・手水稽古・見分が二日間行われたが、⑧【日記】の米屋の日記には掃除・手水稽古などの記事がみえない。恐らく御殿内掃除などには米屋は関与せず、米屋が実際に業務に関与し始める初日は着興予定日より四日前の二月二二日であったと思われる。この日の米屋は「進物上納」とあるので幕府役人・御馳走大名家来などへ挨拶回りを行い、その後実務に着手したものである。米屋の差配する人足たちが実際に伝奏屋敷に入る入込は、先着予定日の二月二五日であったが、川支のため全ての予定が二日延期されたため、実際に人足が伝奏屋敷入りしたのは二月二七日のことであった。

勅使一行が伝奏屋敷に着興したのは二月二八日、発興は三月七日であるから、江戸滞在九日（先着から算えれば一〇日）であった。嘉永二年（二八四九）の江戸参府期間中の重要スケジュールは、將軍への対顔（三日目）、御能拝見（四日目）、御三家の伝奏屋敷訪問（五日目）、であった。

米屋は公家衆が発興した翌日の三月八日御用済となり、伝奏屋敷に詰めていた人足ともども引き払いとなった。

ハ) 御馳走体制

①【御馳走請負体制】

嘉永二年（一八四九）の御馳走体制は三人の御馳走役大名と幕臣が務める御掛役人から構成されている。このうち御掛役人を一覧すると【表10】のようになる。これによれば幕府方役人は、御掛役人（二〇人）と増御掛役人（一五人）に大別されている。これは通常二人の勅使が四人参府していることへの対応であろう。四人の勅使の御馳走体制に動員された幕府方役人全三五人のうち、大熊善太郎・林部善太左衛門・小田又七郎・小笠原信助・吉田保太郎の代官五人は、全員三人宛の手代・手附を出しており、代官層だけでも二〇人を占め、御掛役人の中核を担っていることがわかる。これに加え御勘定組頭一人・御勘定御吟味改役一人・御勘定六人・御勘定吟味下役一人の計一二人の勘定系幕臣たちが列記されている。先に示した御馳走役大名と代官・勘定系の幕臣たちを構成上の特質とする御馳走体制から判断して寛政二年（一七九〇）の改革をうけて成立した参向公家衆御馳走体制は嘉永二年段階でも基本的に継承されていることがわかる。また商人による御馳走役人足の請負こそ冗費の温床となっていたという問題認識から始まった寛政二年の仕法改革の結果、請負商人の関与が否定されたのか、継続したのか史料的には確認できなかった。これに対して今回紹介する米屋田中家による嘉永二年の御馳走役人足の請負事例によって、寛政二年以降も請負商人が引き続き関与していたことが初めて裏付けられたことになった点は注目されたい。

次に御掛役人の役割分担表を【表11】に示した。これによって御馳走体制が、大きくa会所、b御膳所、c諸色方、d人足方、e御用聞、f食座の六つのセクションから構成されていたことが初めて明らかとなっ

【表 11】御掛役人役割分担

a. 会所	代官	大熊善太郎手附	青木新左衛門
	代官	林部善太左衛門手代	荒井汲平
	代官	小笠原信助手代	服部恵八郎
	代官	小田又七郎手代	増井三八郎
	代官	福田八郎右衛門手附	小花徳三郎
b. 壺御膳所	代官	大熊善太郎手附	岡田正助
	代官	小田又七郎手代	大木欽蔵
	代官	吉田保太郎手代	長沢八之助
	飛騨郡代	小野朝右衛門手附	近藤又三郎
c. 式御膳所	代官	小笠原信助手代	中川要吉
	代官	吉田保太郎手代	三枝寛五郎
	代官	山上藤一郎手代	森 忠三郎
d. 三御膳所	代官	林部善太左衛門手代	山田金次郎
	代官	吉田保太郎手代	小田切正作
	西国郡代	池田岩之丞手附	大坪本左衛門
e. 諸色方	代官	林部善太左衛門手代	内山左一郎
	代官	寺西直次郎手代	鯨井太一郎
f. 人足方	代官	大熊善太郎手附	綿貫庄左衛門
	代官	小笠原信助手代	白谷詮蔵
	代官	小田又七郎手代	内海大作
	代官	増田作右衛門手附	松山桑太郎
g1. 三條 御用聞	代官	江川太郎左衛門手附	網野久蔵
	代官	設楽八三郎手附	磯野寛次郎
g2. 坊城 御用聞	代官	竹垣三右衛門手代	松野島助
	代官	里見源左衛門手代	森田善助
g3. 廣橋 御用聞	代官	森八左衛門手代	後藤千蔵
	代官	戸田嘉十郎手代	中嶋金次郎
g4. 堀川 御用聞	上方郡代	柴田善之丞手代	竹山崑三郎
	代官	川上金吾助手代	秋山半六
h. 食座	大津代官	石原清左衛門手代	大橋銑三郎
	代官	多羅尾久右衛門手代	藤尾頼三郎
	代官	小林藤之助手代	高工儀七郎
	代官	藤方彦一郎手代	原田佳作
	代官	岡崎兼三郎手代	斉藤倉次郎
	代官	荒井清兵衛手代	中山平蔵

※帳簿A①より作成

【表 12】請負人足の人数

	着興前	着興後
	2/25～26	2/27～3/7
壺ノ御殿	52 人	79 人
式ノ御殿	32 人	46 人
三ノ御殿	32 人	46 人
	116 人	171 人

※帳簿A②より作成

た。このうちa会所は、本部機能をもった役所、b御膳所は三つの御殿毎に壹御膳所、貳御膳所、三御膳所の三つが存在し、それぞれ代官の手代・手附層が、四人、三人、三人が配置され、そのうち一人が筆頭に位置づけられていた。c諸色方は物資の購入、d人足方は、米屋のような請負商人を監督するセクション、御用聞は、勅使一人に二人宛の代官が配置されている。fは勅使への食膳提供ではなく、食膳提供作業にあたった御料理方働人足へ提供された食膳を作る部署であったが、この食座には六人の代官の手代・手附が配置された。

全体を通して【表10】に示された幕臣にはみられない、代官の手代・手附が多数動員されている。中には飛騨郡代や西国郡代など遠国系の代官までも動員されており、寛政三年以降、実施体制に変更が加えられた可能性が高い。

### （3）御膳向料理人足の人数と配置（請負と実際）

#### イ）請負時の人足数と配置

②【御参向御料理方働人足御注文帳写】には、表題のとおり米屋が幕府から請け負った「御料理方働人足」の種類と人数が明記されている。その内容は帳簿C「御参向御料理方働人足御注文帳写」と殆ど同一ものであるが、帳簿Cには、帳簿Aの一部である②【御参向御料理方働人足御注文帳写】には存在しない米屋の請負金額（総売上）が明記されており、この点が大きな違いになっている。伝奏御膳における米屋の収支分析は、帳簿Bの項に譲り、ここでは幕府は米屋にどのような人足を、どれだけ請け負ったのか、その人数と種類・配置の分析から着手したい。

【表12】は米屋田中家が請け負った御料理方働人足の配置を一覧したものである。まず御料理方働人足の請負実務を時間軸で区分すると、着輿前と着輿後に分けられている。着輿前とは勅使の先遣である雑掌・用人が到着してから勅使が着輿するまでの二日間（嘉永二年の場合、二月

二五日から二月二六日まで）のことである。これに対して着輿後とは、勅使が伝奏屋敷に着輿した二月二七日から発輿し、業務が完了する三月七日までの十日間のことであり、時間的には勅使着輿前の二日間と勅使着輿後の一〇日間とに分割された。

②に示された幕府発注の人足たちの惣人数を、着輿前後で比較してみると、着輿後一七一人、着輿前一六一人となる。着輿後の配置人数は発輿前の概ね一・五倍であった。

また御料理方働人足は、伝奏屋敷内にあった壹から三の御殿に空間的に分割、配置されており、これまで引用されてきた『藤岡屋日記』の記載<sup>22</sup>の正確さを裏付けるものとなっている。この三つの御殿が人足たちの労働の現場であったが、御殿の数は逗留する勅使の人数に応じて変わっていたようで、嘉永二年の場合、定式の勅使が壹ノ御殿を、別勅使が貳ノ御殿を、女御使が三ノ御殿をそれぞれ使うことになった。配置された人数をみると壹ノ御殿が五二人、貳・三ノ御殿はその六割程度で三二人宛であった。別勅使や女御使といった臨時の使節がない通常の年ならば壹ノ御殿だけを使用したであろうから、その規模は着輿前が五二人、着輿後が七九人と嘉永二年の半分程度の規模であったと推測できる。

②に記載された役割と人数の間には朱書きで数字が記載されている。具体例をあげれば「飯焚 三三五 三人」とある。この「三三五」という数字は、⑭【御膳所中通働人足請負人数・賃銀】に記された請負人足賃銀と一致することから、飯炊に支給された一日、一人あたりの給銀単価が、銀三匁三分五厘であることが判明する。米屋田中家が請け負った人足の賃給銀単価・人数を⑭【御膳所中通働人足請負人数・賃銀】によって一覧したのが【表13】である。これには米屋田中家が請け負った伝奏御膳人足の全体が一覧できる。これを見ると、米屋田中家が請け負った伝奏御膳人足は、①先着後二日前と②着輿後一〇日間にわけることがで

【表 13】嘉永2年 御参向公家御賄請負 請負金額内訳

①先着後 (2月22日～23日) 2日間

	御殿			人数計	給銀 単価	日数	給銀計	
	壺	式	三					
1 御椀澄方	6	5	5	16	1.75	2	56	14.1%
2 中下椀方	12	7	7	26	1.675	2	87.1	22.0%
3 同手伝	12	6	6	24	1.1	2	52.8	13.3%
4 板之間	12	8	8	28	1.675	2	93.8	23.7%
5 同手伝	10	6	6	22	1.1	2	48.4	12.2%
小計①	52	32	32	116				
弁当				116	0.5		58	14.6%
計①							396.1	

②着興後 (2月27日～3月7日) 10日間

	御殿			人数計	給銀 単価	日数	給銀計	
	壺	式	三					
1 御椀澄方	2	2	2	6	3.5	10	210	4.3%
2 中下椀方	9	5	5	19	3.35	10	636.5	12.9%
3 同手伝	4	3	3	10	2.2	10	220	4.5%
4 板之間	9	6	6	21	3.35	10	703.5	14.3%
5 同手伝	4	2	2	8	2.2	10	176	3.6%
6 中通給仕	16	8	8	32	3.5	10	1120	22.8%
7 飯焚	3	3	3	9	3.35	10	301.5	6.1%
8 同手伝	3	1	1	5	2.2	10	110	2.2%
9 盛方	3	2	2	7	3.35	10	234.5	4.8%
10 煮方	3	2	2	7	3.35	10	234.5	4.8%
11 同手伝	4	2	2	8	2.2	10	176	3.6%
12 焼方	2	2	2	6	3.35	10	201	4.1%
13 同手伝	1	0	0	1	2.2	10	22	0.4%
14 洗方	6	3	3	12	1.8	10	216	4.4%
15 運び	3	1	1	5	1.8	10	90	1.8%
16 水汲	3	2	2	7	1.8	10	126	2.6%
17 下部給仕	4	2	2	8	1.8	10	144	2.9%
※帳簿B⑭より作成。	79	46	46	171		計②	4921.5	

総計 (史料値) ① + ② 5317.6

此金 88 両 2 分 + 永 126.96 文 (83.6%)

食札代 + 食座足輕 金 18 両 2 朱 (17.1%)

定式引 金 3 分 永 136 文

総計 金 105 両 3 分 2 朱 + 銭 289 文

【表 14】給銀単価 (請負人足) と役割 (壺ノ御殿)

給 銀	先着後	着興後	役 名	役割区分
	2/25 ~ 26	2/27 ~ 3/7		
3.5 匁	6 人 (11.5%)	18 人 (22.8%)	御椀澄方・中通給仕人	給 仕
3.35 匁	24 人 (46.2%)	29 人 (36.7%)	中下椀方・板之間・飯焚・煮方・焼方・盛方	調 理
2.2 匁	22 人 (42.3%)	16 人 (20.2%)	手伝 (中下椀方・板之間・飯焚・煮方・焼方)	調理補助
1.8 匁	0	16 人 (20.2%)	洗方・運び・水汲・下部給仕	下 働
52 人		79 人		

【表 15】 請負時と実際の役割配置比較（着輿後・壺御殿）

請負時の配置	人数	実際の配置	人数
1. 御椀澄方	2	御椀澄方	2
2. 中通給士人	16	煮 方	1
3. 中下椀方	9	極 方	1
4. 同手伝	4	板 先	1
5. 洗 方	6	焼 方	1
6. 青士三職人運	3	摺 方	1
7. 盛 方	3	鍋 洗	1
8. 飯 焚	3	御膳焚	1
9. 同手伝	3	同手伝	1
10. 煮 方	3	水 汲	1
11. 同手伝	4	煮 方	2
12. 臺子とも水汲	3	同手伝	2
13. 板之間	9	極 方	1
14. 同手伝	4	焼 方	1
15. 焼 方	2	同手伝	1
16. 同手伝	1	板 先	2
17. 下部給士	4	同手伝	2
総 計 79		切出シ	2
		摺 方	1
		蔵 方	1
		水 汲	2
		酒 方	1
		油 方	1
		椀 方	5
		同手伝	2
		運 び	3
		洗 方	3
		釜 屋	2
		同手伝	2
		給士人	16
		盛 方	3
		椀 方	4
		同手伝	2
		洗 方	3
		給士人	4
		総 計 79	

内訳		
正 人	67人	計79人
○印付き	12人	

正人内訳		
本 人	34人	計67人
中 人	14人	
平 人	19人	

帳簿Aより作成。

下払人数内訳（着輿後・壺御殿）		
本 人	17人	計62人
澄 方	6人	
手 伝	14人	
平 人	10人	
給仕人	15人	

帳簿Bより作成。

き、空間的には壺ノ御殿、式ノ御殿、三ノ御殿の三つに分けることができた。これらの違いをふまえ改めて【表13】をみると、実に多くの種類の役割をもった人足たちを請け負っていたことがわかる。人足の役割名にのなかに、中通り、中下、下部などといった表現が散見されるが、こうした名称は、料理史研究の成果（濱田・林一九八九）に拠れば、勅使一行の身分構成と深く関わっていたことがわかる。すなわち勅使一行は、勅使自身、勅使の随行である中通り（雑掌・用人・近習・医師・青士）、下部（小頭を含む）の三つから構成されており（【表2】参照）、中通り給仕人とは雑掌・青士に対する給仕人であり、中下・下・下とは、中通りと下部に対する下方ということになる。

次に給銀単価ごとに人足たちを整理してみると【表14】のようになる。これによれば幕府が設定した一日一人あたりの給銀単価は、高い順に銀三・五匁↓銀三・三五匁↓銀二・二匁↓銀一・八匁の四つの段階が設定されていた。ここに一覧された役割を個別にみると、給銀単価三・三五匁のグループに料理人足の具体的な作業を冠した人足（洗方・盛方・飯焚・煮方・焼方）が列記されており、その手伝にあたる人足が給銀二・二匁のグループに位置づけられ、運び・水汲・洗方など作業に技術的な要素が少なく単純な肉体労働↓下働きが最も給銀単価が低い一・八匁に位置づけられていることがわかる。

また米屋田中家が提出した⑨【嘆願】には、自らが調達した奉公人を「御料理方働人足并二給仕人之者共」と表現しており、これらの諸点を勘案すれば、伝奏屋敷における御料理方働人足は、以下の四つに区分することができるとする<sup>23</sup>。

- i 勅使一行の接遇サービスする人足Ⅱ給仕（給銀単価三・五匁）
- ii 料理をつくる人足Ⅱ調理（給銀単価三・三五匁）
- iii 料理作りを手伝う人足Ⅱ調理手伝い（給銀単価二・二匁）
- iv 単純な肉体労働にあたる人足Ⅱ下働（給銀単価一・八匁）

このうち最も人数が多いのがii調理関係の人足である。ii調理人足・iii調理補助人足だけは先着後から多くの人数が配置されており、調理準備作業が先行して開始されていた実態が垣間見える。この⑩【諸雑用方】には「壺式三料理人部屋番江遣ス」とあり、壺・三の各御殿の中に料理人部屋がそれぞれ存在していたことがわかり、人足の種類毎に部屋が形成されていた様子をうかがい知ることができる。⑪【食札代渡方】にも「駕籠宿」の記載がみる。伝奏屋敷内の部屋構造は、全く知り得ないブラックボックスである現状からすれば興味深い情報といえる。

#### ロ 実際の配置と人数

②【御注文帳写】は幕府が米屋に対して発注した人足の種類と人数を記録したものであったが、これに対して④【働人足名前書上】は幕府から請け負った伝奏御膳を実施するために、米屋が実際に配置した人足の種類と人数を書き留めたものである。換言すれば、②の記載に基づき作成した公式的な人足配置であり、米屋の売上げを決定する書類であったのに対して、④【働人足名前書上】の記載に基づいて作成した現実的な人足配置であり、米屋の支出を規定する書類であったといえる。

注目すべきは幕府から請け負った段階での表向きの人足配置と実際の人足配置に相違がみられる点である。【表15】は、壺ノ御殿における②の請負時の段階と④【働人足名前書上】の実際の配置の役割と人数とを比較し、その対応関係を明らかにするために同じ項目を直線で連結したものである。請負時（左側の表）の項目のうち直線によって連結されない項目は網掛けした三項目（11煮方手伝の四人中二人、13板之間九人、14同手伝四人）であり、この項目について実際の配置との齟齬が発生している。この齟齬がなぜ発生するのかを検討するため、その内訳をみてみると、その齟齬が⑥【心得之事】によって補正されていることがわかる。そこで⑥【心得之事】の内容をみてみよう。⑥【心得之事】に示された配置変更を一覧すると【表16】のようになる。これらの配置変更を

【表 16】「心得之事」（帳簿 A⑥）にみる役割の転換

請負時役割		実際の役割				
板之間	9 人	御膳所	極方	1 人	9 人	壱ノ御殿
			板先	1 人		
			摺方	1 人		
		中通り	極方	1 人		
			板先	2 人		
			蔵方	1 人		
			切出し	2 人		
板之間 手伝	4 人	御膳所	鍋洗	1 人	4 人	
		中通り	板先手伝	2 人		
			摺方	1 人		
煮方手伝	2 人	中通油方		1 人	2 人	
		酒方		1 人		
板之間	6 人	御膳所	極方	1 人	6 人	式ノ御殿
			摺方	1 人		
			中通り	蔵方		
		板先		1 人		
		極方		1 人		
		切出し		1 人		
		板之間 手伝	2 人	板先手伝		
摺方	1 人					
煮方手伝	1 人			1 人	三ノ御殿	
24 人		24 人				

【表 15】の実際の配置のなかに組み込んで対応関係を補正し、これによって補正した対応関係を破線で示すと、請負時の配置と実際の配置がほぼ対応することがわかる。すなわち米屋は請負時の配置を実際の配置の際に変更し、その変更内容の記録として⑥【「心得之事」】を作成したと結論できよう。

このように、米屋田中家は、壱ノ御殿、式三ノ御殿ともに、板之間、板之間手伝、煮方手伝を独自の判断で配置転換していた。こうした配置変更は、伝奏御賄の現場を担い続けてきた請負商人が獲得した経験知に基づく現実的な対応であったといえよう。

米屋田中家は、人足の役割配置だけではなく、配置された人数も経験

知に基づき独自に変更していたことがわかる。まず【表 15】から実際の配置人数の内訳をみると、御膳所（二人の勅使御賄所）、中通り（中通りの家臣団一四人<sup>24</sup>の御賄所）、下部（下部三〇人の御賄所）の三つに分かれて配置されており、その人数配分は、それぞれ一人（一人あたり五・五人）、五二人（一人あたり三・七人）、一六人（一人あたり〇・五三人）であり、身分上位に手厚く人足を配置していたことが数値的に確認される。次に【表 15】の総人数をみると、壱ノ御殿に配置された人足数は請負時、実際時ともに七九人ではないようにみえる。しかし、全七九人は正人六七と〇付き（④のなかでは〇を付けて表記されている）の非正人一二人の区分がもうけられ、六七人の正人は、さらに本人三四人（五〇・七％）・中人一四人（二〇・九％）・平人一九人（二八・四％）に分けられている。⑮【勸人足下払并諸雑用記】から作成した【表 17】のうち壱ノ御殿（着興後）の人足として実際に給金が支払われた人数だけを抜き出した数値と比べてみると、その数は正人数六七人よりも更に少ない六二人であった。六二人は実際に下払された数なので現実の数に最も近いはずである。正人とは実際に配置された数になる予定であったが、実際には何らかの都合により変更が生じたものであろうか。詳細には確認できないが、いずれにしろ米屋が幕府から請け負った段階で人数と実際に配置した人数には大きな乖離が存在し、実際に配置された人数の方がかなり少ないことは間違いない。その数の違いが米屋の収益になったのであるが、その分析については次節に詳述する。

（4）収支 請負金と下払

イ）請負金（収入）

伝奏御賄向人足を幕府から請け負った米屋田中家の収入は、人足賃銀の総和の形で導き出された。この方式は参勤交代の通日雇人足の請負形式であった単価契約方式に似ている。しかし次の点において異なっている。

【表 17】惣下払内（総支出）訳表

下払額①（御番所請取）

ランク	下払給	御殿					日数	下払額	支払先
	単価	壺	式	三	計				
本人	150	10	8	8	26	2日間	7,800	兼次郎 徳次郎 亀次郎 新兵衛	
手伝	100	8	4	4	16		3,200		
澄方	150	12			12		3,600		
蔵方	150	12			12		3,600		
平人	74	0	0	0	0		0		
弁当代	32				66		2,200		
※単位：銭（文）		42	12	12			20,400		

下払額②（2/27～3/7）

ランク	下払給	御殿					日数	下払額	支払先
	単価	壺	式	三	計				
本人	300	11	9	9	29	10日間	87,000	兼次郎 徳次郎 亀次郎 新兵衛	
手伝	200	11	6	6	23		46,000		
澄方	300	6			6		18,000		
平人	148	3	1	1	5		7,500		
※単位：銭（文）		31	16	16	63		158,500		

下払①+② 178,900

此金 27両2分+148文 内金15両 3月朔日渡

下払額③（御番所請取）

ランク	下払給	御殿					日数	下払額	支払先
	単価	壺	式	三	計				
本人	150	2	2	2	6	2日間	1,800	兼次郎・徳次郎 亀次郎・新兵衛	
手伝	100	2	2	2	6		1,200		
弁当代	32				12		400		
※単位：銭（文）		4	4	4			3,400		

下払額④（2/27～3/7）

ランク	下払給	御殿					日数	下払額	支払先
	単価	壺	式	三	計				
本人	300	5	3	3	11	10日間	33,000	兼次郎・徳次郎 亀次郎・新兵衛	
手伝	200	2	2	2	6		12,000		
平人	148	7	3	3	13		19,500		
※単位：銭（文）		14	8	8	30		64,500		

下払③+④ 67,900

此金 10両1分2朱+460文 内金5両 3月朔日渡

下払⑤（2/27～3/7）

ランク	下払給	御殿					日数	下払額	支払先
	単価	壺	式	三	計				
本人	300	1	1	1	3	10日間	9,000	釜屋伝吉	
手伝	200	1	0	0	1		2,000		
※単位：銭（文）		2	1	1	4		11,000		

下払⑤銭 11,000 文

此金 金1両2分2朱+436文 内金1両 3月朔日渡

下払⑥（2/27～3/7）

ランク	下払給	御殿					日数	下払額	支払先
	単価	壺	式	三	計				
給仕人	2.5	15	8	0	23	10日間	575	配膳留次郎	
※単相：銀（匁）		15	8	0					

下払⑥銀 575 匁

此金 金9両2分+540文 内金5両3分 3月朔日渡

下払⑦（2/27～3/7）

ランク	下払給	御殿					日数	下払額	支払先
	単価	壺	式	三	計				
給仕人	2.5	0	0	8	8	10日間	200	配膳文右衛門	
※単相：銀（匁）		0	0	8					

下払⑦銀 200 匁

此金 金3両1分+540文 内金2両 3月朔日渡

下払⑧

ランク	下払給	御殿					日数	下払額	支払先
	単価	壺	式	三	計				
食座	74	12			12	2日間	1,800	食座 喜太郎	
	150	9	6	6	21	10日間	31,500		
※単位：銭（文）							33,300		

下払⑧銭 33貫 300 文

此金 金5両+800文 内金2両2分 3月朔日渡

惣下払（①+②+③+④+⑤+⑥+⑦+⑧）

金57両2分2朱+492文（史料値）

下払額①+③（御番所請取）

ランク	下払給	御殿					日数	下払額	支払先
	単価	壺	式	三	計				
本人	150	12	10	10	32	2日間	9,600	兼次郎 徳次郎 亀次郎 新兵衛	
澄方	150	12			12		3,600		
手伝	100	10	6	6	22		4,400		
蔵方	150	12			12		3,600		
平人	74	0	0	0	0		0		
弁当代	32				78		2,600		
※単位：銭（文）		46	16	16	78		23,800		

下払額②+④（2/27～3/7）

ランク	下払給	御殿					日数	下払額	支払先
	単価	壺	式	三	計				
本人	300	16	12	12	40	10日間	120,000	兼次郎・徳次郎 亀次郎・新兵衛	
澄方	300	6			6		18,000		
手伝	200	13	8	8	29		58,000		
平人	148	10	4	4	18		27,000		
※単位：銭（文）		45	24	24	93		223,000		

下払額⑥+⑦（2/27～3/7）

ランク	下払給	御殿					日数	下払額	支払先
	単価	壺	式	三	計				
給仕人	2.5	15	8	8	31	10日間	775	配膳	
※単位：銀（匁）									

る。単価契約方式は事前に合意した単価に事後確定する数量を掛けて算出されたが、伝奏御賄向人足の場合、全て事前に金額が確定していた。米屋の支出は決して人件費だけではなかったことは、米屋を監督していた幕府代官にとっても自明のことであつたはずである。例えば発注する側の幕府代官などが受け取っていた贈与物などの経費が掛かっていることは発注する側の幕府も承知していたはずであるが、全ての経費を人件費の形で支払っていた。

では嘉永二年（一八四九）の伝奏御賄向人足の請負から米屋が取得する代金はどの程度の金額に達していたのであろうか。【表13】は、⑭【御膳所中通働人足人数・賃銀】から作成したもので米屋田中家の請負金額（収入）とその内訳を示したものである。請負金額金一〇五両三分二朱錢二八九文、この請負金は人件費八八両二分（八三・六％）と食札代一八両〇分二朱（一七・一％）で構成されていた。

食札とは、幕府が米屋配下の日用人足たちへ支給した食券のことである<sup>25</sup>。米屋田中家は、自ら調達した人足達を指揮命令して御賄を実現することを請け負ったのであるが、その人足達に食事を提供する義務は米屋田中家ではなく幕府の側が負うべきものと認識されていたことがわかる。しかし幕府は、御賄人足たちに食事を提供する義務を、現金を支払って米屋田中家に委託していた。したがって米屋田中家から雇用されていた人足にとって、雇用主から食事が提供されていたかのように感じられたはずである。

米屋に支給された食札代は全体で三四八四人の三分の一、一一六一・三人に単価〇・九匁を乗じた総額一〇四五・二匁が算出されている。これに給銀一・五匁の食座触足軽三人を一〇日間雇用する計算で四五匁が計上され、合計一〇九〇・二匁（金換算で金一八両二朱）が米屋田中家に支給された。しかしこの数字には不明な点が多い。全体の三四八四人の算出根拠が不明なうえに<sup>26</sup>、それを三分の一にする根拠も不明だからであ

【表 18】勅使一行御馳走行列人数（寛政 3 年）

## ①品川宿・伝奏屋敷間

人足種類	人数
先払足軽	2
陸尺	3
奴	3
御用櫃	8
歌書御筆筒	4
茶弁当持	4
小弁当持	4
筆筒持	4
両掛挾箱持	4
輿台持	4
桐油持	4
胡床持	1

45

## ②伝奏屋敷・江戸城間

人足種類	人数
先払足軽	2
陸尺	3
小奴	9~27
提灯持	14
釣台持	4
宰領足軽	1
合羽籠持	12
押足軽	2
輿台持	2
茶道具	1
茶弁当	1

51~69

※『市史稿 産業篇 35』、328 頁より。

る。三分の一にした理由は、あるいは参向公家衆御馳走役を全体として三人の商人によって請け負った可能性を指摘しておきたい。米屋田中家が請け負ったのは伝奏御賄だけで、それ以外にも多くの請負事項が存在していたはずである。例えば品川宿から伝奏屋敷までの移動する際には運搬目的だけでも四五人の人足が必要とされ、伝奏屋敷から江戸城までのごく短い距離にも行列を組むために五一人〜六九人もの人足が必要としたことが寛政三年（一七九一）の記録にある（【表18】参照）。この事は、米屋以外にも請負商人が存在していた事実を示している。⑰【諸雑用】に「仲ヶ間二軒江委曲立替相渡」とあり、伝奏御賄を含めた参向公家衆御馳走役の請負商人が米屋の他に二軒あったことを示唆している。三四八四人を三で割った理由も三人の商人に均等に割ったからではなかったか。

口)支出および収益

【表19】は⑮【働人足下払并諸雑用記】をもとに嘉永二年（一八四九）

【表 19】総収支

下払

支払先		両	分	朱	銭／文	
a. 兼次郎・徳次郎・亀次郎・新兵衛		37	3	2	608	65.6%
b. 釜屋傳吉		1	2	2	436	2.8%
c. 配膳	留次郎	9	2		540	16.5%
	文右衛門	3	1		540	5.6%
d. 食座喜太郎		5			800	8.7%
下払合計（史料値）		57	2	2	492	

総支出

項	目	両	分	朱	銭／文	
下払合計（a+b+c+d）		57	2	2	492	79.9%
e. 食札代		7		2	620	9.8%
f. 諸雑用		7	2		506	10.4%
支出合計（a+b+c+d+e+f）		72	1	2	810	

総収入

項	目	両	分	朱	銭／文
壹御殿 + 貳御殿 + 三御殿		88	2	0	126.96
食札代		18	0	2	289

合計（計算値・銭省略）	106 両 2 分 2 朱
定式引（永省略）	3 分
最終売上総額	105 両 3 分 2 朱
最終利益（計算値）	金 33 両 2 分 0 朱
総支出に対する利益の割合	46.3%
総収入に対する利益の割合	31.6%

【表 20】収入・支出の賃銀・人数比較（着興後・全御殿）

ランク		収入	支出		比率
A ランク	賃銀単価	378 文	300 文	本人・	79.4%
	配置人数	38 人	49 人*	御澄方	128.9%
B ランク	賃銀単価	362 文	270 文	給仕人	74.6%
	配置人数	69 人	31 人		44.9%
C ランク	賃銀単価	238 文	200 文	中人・	84.2%
	配置人数	32 人	30 人	手伝	90.6%
D ランク	賃銀単価	194 文	148 文	平人	76.1%
	配置人数	32 人	18 人		56.3%

人数合計 171 人 128 人

※収入の賃銀単価は銀 1 匁＝銭 108 文の時相場で換算

\* 本人 43 人と御澄方 6 人の合計

【表 21】食札代渡方（2/28～3/6 8 日分）

ランク	下払給	御殿				日数	下払額
	単価	壹	貳	三	計		
食座	64	7	18	12	37人	8 日間	19,732
		30			30人		16,000
		21			21人		11,200

※単位：銭（文） 88人 46,932

銭 46 貫 932 文 此金 7 両 2 朱 + 620 文（史料値）

の伝奏御賄にともなう米屋田中家の全支出を一覧したものである。総支出は金七二両一分二朱余、最終利益は金三三両二分であった。総収入一〇五両三分二朱に対する最終利益の割合は三一・六％で、概ね三分の一が利益であった。従って米屋田中家は請負金の約三分の一を利益として手元に残し、約三分の二を支出して幕府の期待する実務を請け負い、高率の利益を稼いだしていたイメージである<sup>27</sup>。

総支出は次の三項目からなっている。下払金五七両二分二朱余（七九・九％）、食札代七両〇分二朱余（九・九％）、諸雑用七両二分〇朱余（一〇・四％）となっている。

### ①収益構造

米屋田中家は嘉永二年の伝奏御賄請負によって高率の利益を取得していた。売上げの三分の一近くを利益として確保するような高収益体質は、嘉永二年の特殊事例ではなかったと思われる。確かに別勅使や女御使が参向した嘉永二年は通常の年とはいえない。量的には売上・利益ともに高額に達したはずであるが、率的には毎年の伝奏御賄請負でも同様のものであったと想定される。ではこうした高収益はどのような構造によってもたらされていたのだろうか。

【表20】は、収入と支出における着興後一〇日間の賃銀単価と配置人数を比較対照するために作成したものである。これを見ると収入、すなわち請負時に設定された給銀単価と人足配置数が現実の支出の段階にはどうなっているのかをみると、Aランクの配置人数を唯一の例外とすると、いずれも支出の段階になって賃銀単価・配置人数ともに削減されている。米屋田中家は、幕府から受け取った請負金の算出根拠となった賃銀単価・配置人数を現実の支出の際に相当割合で低く抑えていたのである。一例を挙げれば収入時のDランクの賃銀単価一九四文は実際には一四八文しか支払っていないし、配置人数も三二人のところ一八人しか配置していないのである。ここに米屋田中家が高い利益を確保する秘

訣があったといえよう。

### ②下払

では次に米屋の総支出の内訳を掘り下げてみたい。

総支出七二両一分二朱のうち五七両二分二朱（七九・九％）を占めた下払は、米屋田中家が伝奏御賄の請負を実施するための中核的な支出であった（【表18】参照）。なかでもa兼次郎・徳次郎・亀次郎・新兵衛の四人への支出は下払全体のうち三七両三分二朱（下払合計に対する割合六五・五％）を占め、支出全体に占める割合も五二・三％に達した。次に差配した人数の割合をみてみよう。【表17】は下払の内容を詳細に検討するために作成した表である。この内の下払額②+④（ $2/27 \sim 3/7$ ）に注目すると、兼次郎以下の四人が、着興後の一〇日間（ $2/27 \sim 3/7$ ）に差配した人足の総数が九三人であったことがわかる。これは【表19】にある実際に配置された全人足数二八人の七二・七％に及び、この四人が実務を請け負った割合は、金額ベースでみたよりも、人足数ベースでみた方がさらに圧倒的であった。

このように米屋は伝奏御賄の実務を遂行する際に、a兼次郎・徳次郎・亀次郎・新兵衛へ依存する一方で、自らは人足を調達・差配した形跡がない。まさにこの四人が米屋の伝奏御賄を支えていた中核といえる。注目すべきは兼次郎・徳次郎・亀次郎・新兵衛の四人ともに屋号がなく名前のみの記載である点である。これはb～dの下払が、釜屋・配膳・食座等、いずれも屋号や役割名を関した名前で支払いが管理されていた点にくらべるとよくわかる。このことはa兼次郎・徳次郎・亀次郎・新兵衛が、米屋田中家の同族団であったことを示すものと考えられる。おそらく米屋の伝奏御賄請負の業務を遂行するにあたり、釜屋と配膳（給仕）だけを米屋関係者以外に外注し、それ以外は米屋同族団で請け負ったのであろう。a兼次郎・徳次郎・亀次郎・新兵衛の四人はまさに米屋の伝奏御賄業務の屋台骨を支える中核であり、その配下には多くの料理方

足たちが存在していたはずである。米屋田中家のこうした分節的な構造は、家業確立期の延享二年にはすでに存在しており（市川二〇一八）、こうした分節的な同族組織を駆使して多数の伝奏御賄方料理人足を指揮・命令し、請負を実現していたのである。

### ③ 食札代

米屋は、伝奏御賄に従事した多くの人足達への食事提供を幕府から委託されている。米屋田中家は、参向公家衆とその随行のために食事を提供する役割を請け負ったが、同時にそこに従事する多くの人足たちへの食事提供をも同時に請け負ったことになる。幕府から請け負った人足への食事提供代金が【表19】の総収入のうちの食札代一八両余である。これに対して食札代として支出された額の内訳を一覧した【表21】をみると、支出額七両〇分二朱で請負代金の六〇％が利益に回ったことになる。額は少ないがかなりの高率であった。人足の食事代は米屋田中家によって大きく搾取されていたといえる。

### ④ 諸雑用

諸雑用とは文字通り雑費である。その額は七両二分で、主に代官を中心とした幕府役人などへの進物代、食札買上代などによって占められていた。総支出に対する割合は、金額としては一〇・四％を占めており【表19】、決して小さい額ではない。幕府の関係諸役人への進物の贈与は米屋本体が直接行った数少ない実務であった。

進物が贈られたのは、御番所請取の時、將軍との対顔が無事に済んだ時、引き払いの時などで、主な贈り先は、御膳所の担当となった幕府代官の手代層（大熊善太郎手代岡田正助、吉田保太郎手代三枝寛五郎、林部善左衛門手代山田金次郎）、町奉行与力・同心衆等であった。進物の内訳は、山嘉園（山本山の海苔）、ウナギ、醤油、酒などであった。

## 四、結論

本稿での成果を以下のように整理する。

① 一七世紀以来、参向公家衆御馳走役の担い手は概ね次のように変遷した。

第一段階（一七世紀） 大名役+町人足役（現夫）

第二段階（元禄〜享保期）町人足役の代銀納（大名へ納付）↓大名役

への一本化↓大名役の商人請負の進行

第三期（安永期） 請負商人への依存・入札の形骸化による冗費の発生

第四期（寛政期以降）参向公家衆御馳走仕法改革の実施（伝奏御賄が

大名から幕府代官へ移管・商人請負の継続）

② 参向公家衆御馳走役の商人請負の始期は未確認ながら、少なくとも享保期には町触のレベルで確認された。米屋田中家においては、伝奏御賄の請負が確認されたのは延享二年（一七四五）であった。そして安永期には、請負商人への依存が冗費の増大となって顕在化し、参向公家衆御馳走仕法は制度疲労として問題視されるようになった。

③ 延享二年段階の米屋田中家は、大名家から伝奏御賄の受注を目指して営業活動を展開していた。その頃の家業の柱が仕出御賄請負であり、この段階の米屋田中家は日本橋通一丁目木原店に居を構え、仕出屋を営みながら小規模な仕出需要をひろく受注していたと推定され、やがて伝奏御賄だけの請負へと発展を遂げていった。米屋の発展事例は、一七世紀後半以降、江戸の町方に勃興した各種請負商人の一事例として位置づけられる。

④ 安永期の参向公家衆御馳走役は、大名から実務を請け負った商人たちによって実質的に担われるようになっていた。参向公家衆御馳走役の請負商人は大名家が実施する入札によって決定されたが、一部の商人に実

務の経験知が独占的に蓄積され、それ以外、事実上応札することができず入札による請負商人決定システムは形骸化をみるにいたった。特定商人による独占が、大名の過度な依存状況を生み、冗費発生の根源となっていた。こうした変化が安永期の参向公家衆御馳走仕法改革が構想された背景となっていた。

⑤安永期に提起された御馳走役仕法改革は、寛政二年（一七九〇）に実を結び、寛政三年（一七九一）から実施にうつされた。改革の最大のポイントとは、御馳走役大名がになってきた伝奏屋敷における御賄を切り離し、幕府代官の管轄に変更し、かつ勘定系の幕臣を動員して監察させた点にあった。しかしこうした改革によって商人による伝奏御賄などの御馳走役の請負が禁止されたのか否かは確認できなかった。

⑥寛政三年に実施された参向公家衆御馳走仕法改革から約五〇年が経過した嘉永二年（一八四九）の米屋田中家による伝奏御賄の請負事例の分析から、概ね寛政二年の仕法改革により成立した管理・執行体制は、嘉永二年でもほぼそのまま継続されていたことが判明した。こうした史実から判断して、寛政二年の仕法改革は商人による御馳走役の請負を否定したものではなく、請負商人の存在を前提とした改革であったと考えられる。

⑦米屋田中家は嘉永二年の参向公家衆御馳走役を他の二商人とともに請け負った。米屋が担当したのは伝奏屋敷での食事提供である伝奏御賄であり、その請負金（収入）は金一〇五両余り、支出は金七二両余り、利益は金三三両余りで、収入に対する利益の割合は三一・六%であった。米屋田中家は幕府から請け負った人足配置・種類・人数を独自の経験知で自在に変更・削減して請け負うことで高い利益を導き出していた。

⑧田中家は、四人の同族団を中核に据え、その他に釜屋・配膳・食座の各商人を組み合わせた分節的な下請負体制を構築し、伝奏御賄を実現した。

⑨嘉永七年（一八五四）に成立した「歳々記」において、伝奏御賄だけが家別ではなく年代順に整理されてきたのは、寛政三年（一七九一）に実施された参向公家衆御馳走仕法改革により、伝奏御賄が大名から幕府代官へと移管された結果を反映したものであった。安政以降の「歳々記」の伝奏御賄には、伝奏御賄とは関係のない外国人の宿所の警衛（具体的には「魯西亜人参上ニ付愛宕下真福寺江御逗留中御雇足軽定抱中間非常駆付臨時雇」など）の請負が登場するようになる。その理由は、これらの発注元が伝奏御賄と同様に幕府であった点に求められる。

## 五、史料紹介

### （１）凡例

一、本稿は、江戸東京博物館が所蔵する米屋田中家文書のうち嘉永二年（一八四九）の「御参向御逗留中諸用控」（88209105帳簿A）「御膳所御料理方働人足御勘定仕上帳并下諸雑用」（米屋田中家文書882091101帳簿B）を翻刻し、その内容を紹介するものである。

一、帳簿Aの基本的な形態情報は以下のとおりである。

1 帳簿形態…横帳

2 作成年代…嘉永二年二月

3 作成者…米屋直吉

一、帳簿Bの基本的な形態情報は以下のとおりである。

1 帳簿形態…縦帳

2 作成年代…嘉永二年三月

3 作成者…米屋久右衛門

一、翻刻に際しては、極力原本の体裁を損なわないように配慮しながら、以下のような原則にもとづいて編集を施した。

1 文中に適宜読点（、）、並列点（・）を加えた。

- 2 漢字は当用漢字・常用漢字にあるものは、これらを用い、ないものは正字を用いた。ただし以下の漢字はそのまま用いた。
- 3 宛字・誤字・衍字はそのまま表記して、必要に応じて右傍に(マ)を付した。筆者の補足や誤記を修正する場合は、右傍に( )を付し、推測の場合は(カ)を付した。
- 4 変体仮名は、原則として同音の平仮名にあらためた。ただし「江」「者」「而」「ニ」はそれぞれポイントを下げた漢字を用いた。
- 5 合字はのみ残した。
- 6 欠損、または判読不明の文字は、文字数分の□を用い、文字数が不明の場合は「(文字数不明)」で示し、虫損などは右傍に(ムシ)と表記した。見セ消、抹消字で判読可能文字は、そのまま表記して二重線を施した。
- 7 漢字の踊り字は「々」を用いた。
- 8 意味不明箇所、宛字・誤字・衍字はそのまま表記し、右傍に(マ)を付し、正しい文字がわかる場合は右傍に「○○カ」と記した。
- 9 付箋・貼紙・下げ札などは、その文言を「」内に示し、貼り付け位置がわかるように工夫した。朱字は「」のみを付した。
- 10 本文には朱の合点があるが、翻刻にあたってはこれを省略した。一、本論の行論上の便宜のため史料中に①【御馳走請負体制】、②【御注文帳】などの見出しを挿入した。【】内の用語は極力史料用語を採録するように努めたが、適語がない場合は適宜用語を勘案して付した。丸付き数字は、帳簿A、帳簿Bの通し数字を用いた。

## (2) 史料翻刻

イ)「御参向御逗留中諸用控」(帳簿A)

(表紙)

壹式三

御参向御逗留中諸雑用控

嘉永二酉年二月廿五日御先着

### ①【御馳走体制】

関東江年頭之御祝儀

勅使 三條大納言様

坊城前大納言様

大掌会所御祝儀御使兼之

女御使年頭之御祝儀勅使兼之

入内御祝儀

勅使 広橋大納言様

女御使 堀川三位様

御馳走役

三万石

勅使 田村右京大夫様

奥州一ノ関 愛宕下

二万石

別勅使 南部遠江守様

奥州八戸 市兵衛町

一万五千石  
女御使 松平淡路守様  
因州鳥取新田 鉄砲洲  
五万石  
惣控 溝口主膳正様  
越後新発田 幸橋外  
御掛り御役人  
御勘定組頭  
成瀬藤右衛門様  
御代官  
大熊善太郎様  
林部善太左衛門様  
小田又七郎様  
御勘定御吟味改役  
小嶋仁内様  
御勘定  
後藤隆太郎様  
土屋善九郎様  
吟味下役  
榎本定蔵様  
御普請役  
桑山右源太様  
森井普三郎様  
林金蔵様  
大熊様御手附  
青木新左衛門様

岡田正助様  
綿貫庄左衛門様  
林部様御手代  
荒井汲平様  
小田金次郎様  
御手附内山左一郎様  
小田様御手附  
増田雄左衛門様  
内海大作様  
大木欽蔵様  
増御掛り  
御代官  
小笠原信助様  
吉田保太郎様  
御勘定  
村井健三様  
松田仁三郎様  
助太郎様  
小田直太郎様  
御普請役見習  
安藤三之丞様  
同代り御金蔵同心  
佐々木鋏三様  
林桃三九様  
小笠原様手代  
服部恵八郎様

白谷詮蔵様

中川要吉様

吉田様御手代

三枝寛五郎様

小田切正作様

長沢八之助様

掛り沢

大熊善太郎様御手付

青木新左衛門様

林部善太左衛門様御手代

荒井汲平様

会所

小笠原信助様御手代

服部恵八郎様

小田又七郎様御手代

増井三八郎様

福田八郎右衛門様御手付

小花徳三郎様

／

大熊善太郎様手付

岡田正助様

小田又七郎様手代

大木欽蔵様

吉田保太郎様手代

長沢八之助様

小野朝右衛門様手付

近藤又三郎様

弍御膳所

／

弍御膳所

小笠原信助様手代

中川要吉様

吉田保太郎様手代

三枝寛五郎様

山下藤一郎様手代

森 忠三郎様

林部様手代

山田金次郎様

吉田様手代

小田切正作様

三御膳所

池田岩之丞様手付

大坪本左衛門様

林部様手付

内山左一郎様

寺西直次郎様手代

鯨井太一郎様

／

諸色方

大熊様手付

綿貫庄左衛門様

小笠原信助様手代

白谷詮蔵様

人足方

大熊様手付

綿貫庄左衛門様

小笠原信助様手代

白谷詮蔵様



御注文帳之控

壹御殿

二月廿二日御道具取立兩日  
同廿三日

一御椀澄方	「三五」	五人
一中下椀方	「三三五」	拾壹人
一同手伝	「貳貳」	拾人
一板之間	「三三五」	拾貳人
一同手伝	「貳貳」	拾人
一御椀澄方	「三五」	壹人
一中下椀方	「三三五」	壹人
一同手伝	「貳貳」	貳人
〆五拾貳人	「弁当代五分ツ、」	
御着日夕		
一御椀澄方	「三五」	貳人
一中通給士人	「三五」	拾六人
一中下椀方	「三三五」	九人
一同手伝	「貳貳」	四人
一洗方	「壹八」	六人
一青土運 三職人	「壹八」	三人
一盛方	「三三五」	三人
一飯焚	「三三五」	三人
一同手伝	「貳貳」	三人
一煮方	「三三五」	三人
一同手伝	「貳貳」	四人
一台式も水汲	「壹八」	三人
一板之間	「三三五」	九人
一同手伝	「貳貳」	四人

一燒方 「三三五」 貳人

一同手伝 「貳貳」 壹人

一下部給士 「壹八」 四人

〆七拾九人

貳御殿

御道具取立兩日

一御椀澄方	五人
一中下椀方	七人
一同手伝	六人
一板之間	八人
一同手伝	六人
〆三拾貳人	
御着日夕	
一御椀澄方	貳人
一中通給士人	八人
一中下椀方	五人
一同手伝	三人
一板之間	六人
一同手伝	貳人
一飯焚	三人
一手伝	壹人
一煮方	貳人
一手伝	貳人
一燒方	貳人
一盛方	貳人
一洗方	三人

一青士運	壹人
一下部給士	貳人
一水汲	貳人
一四拾六人	貳人
三ノ御殿	
御道具取立兩日	
一御椀澄方	五人
一中下椀方	七人
一同手伝	六人
一板之間	八人
一同手伝	六人
一三拾貳人	六人
御着日分	
一御椀澄方	貳人
一中通給士人	八人
一中下椀方	五人
一同手伝	三人
一焼方	貳人
一板之間	六人
一同手伝	貳人
一飯焚	三人
一手伝	壹人
一煮方	貳人
一手伝	貳人
一盛方	貳人
一洗方	三人
一青士運	壹人

一下部給士	貳人
一水汲	貳人
一四拾六人	貳人
総人数百七拾壹人	
③【食札早見】	
食札之請取早見	
一 一日分	朝昼 三百四拾貳枚 夕 百七拾壹枚 一 貳千五百拾三枚
一 二日分	朝昼 六百八拾四枚 夕 三百四拾貳枚 一 貳千五百拾六枚
一 三日分	朝昼 千貳拾六枚 夕 五百拾三枚 一 貳千五百拾九枚
一 四日分	朝昼 千三百六拾八枚 夕 六百八拾四枚 一 貳千五百拾貳枚
一 五日分	朝昼 千七百拾枚 夕 八百五拾五枚 一 貳千五百六拾五枚
④【働人足名前書上（帳簿E）】	
壹御膳所	
一御椀澄方貳人	金次郎
一煮方	米吉
一極方	安五郎
一板先	長兵衛
一焼方	虎吉
一摺方	虎五郎
一鍋洗	茂八
一御膳焚	福松
一同手伝	与八
一水汲	忠助
一青士運	清蔵

ノ拾壺人

中通

一煮方 式人〔本嶋〕

才次郎  
十五郎

一手伝 式人〔中同〕

松蔵  
市兵衛

一極方 壺人〔本同〕

長吉

一焼方 壺人〔本同〕

歌吉

一同手伝 壺人〔中同〕

喜三郎

一板先 式人〔中同〕

豊吉

一手伝 式人〔中同〕

清治

一切出シ 式人〔本同〕

安五郎

一摺方 壺人〔中同〕

三五郎

一水汲 式人〔平同〕

源蔵

一蔵方 壺人〔本同〕

善兵衛

一酒方 壺人〔平新〕

安五郎

一油方 壺人〔平同〕

常吉

一椀方 五人〔本同〕

幸三郎

一手伝 式人〔中同〕

伝吉  
安兵衛  
助七  
甚助  
千蔵

一運ひ 三人〔平同〕

金八  
亀吉  
新兵衛

一洗方 三人〔平同〕

文助  
半兵衛  
金次郎  
与十郎

一釜屋 式人〔本伝〕

庄蔵  
清助  
〔〇二〕伝右衛門

一手伝 式人〔中同〕

辰五郎  
〔〇二〕重蔵

一給士人拾六人〔留〕

富次郎  
三吉

弥助  
金次郎

文助  
金助

佐兵衛  
○伊之助  
ニノ良助

寅吉  
吉蔵

金六  
清兵衛  
弥三郎

下部	一盛方	三人〔弥〕	和助	徳次郎	〔〇〕与助	〔〇〕新次	〔〇〕文吉	富五郎	長吉	啓次郎	〔〇〕市右衛門	一洗方	三人	友七	由蔵	新吉	金次郎	新助	柳吉	周吉	合テ七拾九人	内「正六十七人	○拾貳人	内 本人三拾四人	中人拾四人	平 拾九人」									
十次郎	主郎	鉄次郎																																	
式御膳所	一御椀澄方	貳人〔嶋本〕	清吉	勘蔵	峯吉	金次郎	金兵衛	庄吉	長助	勝蔵	徳	豊蔵	豊吉	ノ 九人	中通	一煮方	壹人〔本嶋〕	青吉	庄助	条次郎	初五郎	兼治郎	彦兵衛	鉄五郎	金次郎	長吉	伊三郎	六兵衛	弥三郎						
	一煮方	壹人〔同〕	峯吉	金次郎	金兵衛	庄吉	長助	勝蔵	徳	豊蔵	豊吉	一水汲	壹人〔喜平〕	一手伝	壹人〔同〕	一御膳焚	壹人〔同〕	一摺方	壹人〔同〕	一焼方	壹人〔同〕	一極方	壹人〔同〕	一焼方	壹人〔同〕	一切出シ	壹人〔同〕	一摺方	壹人〔同〕	一水汲	壹人〔同〕	一蔵方	壹人〔同〕	一椀方	三人〔新本〕

一手伝	元助
𠂔人 <sup>[同]</sup> 中	源助
一洗方	幸吉
𠂔人 <sup>[同]</sup> 平	新助
〔〇〕	治郎蔵
一運方	源次郎
𠂔人 <sup>[同]</sup> 平	
一油方	万吉
𠂔人 <sup>[同]</sup> 平	
一釜屋	勝右衛門
𠂔人 <sup>[本]</sup> 伝	
〔〇二〕	新八
一給士人	留蔵
八人 <sup>[留]</sup>	鉄五郎
	十蔵
	丈助
	徳治郎
	篾次郎
	吉五郎
	鉄次郎
	伊三郎
下部	
一椀方	初五郎
𠂔人	
〔〇〕	庄右衛門
一手伝	与七
𠂔人	
一盛方	又蔵
𠂔人	
	豊七
〔〇〕	万吉
一給士方	甚平
𠂔人	

一燒方	一極方	一手伝	一煮方	一水汲	一御膳焚	一摺方	一燒方	一極方	一煮方	一御碗澄方式人	三ノ御膳所	内	○五人	小ノ四拾六人	一洗方	儀右衛門
壹人	壹人	壹人	壹人	壹人	壹人	壹人	壹人	壹人	壹人	本	忠兵衛	本人拾四人	中人拾七人	平	文藏	豐兵衛
本	本	中	本	平	本	中	同	同	同	嶋	貞吉	拾七人	拾人	正四十一人	壹人	儀右衛門
新治郎	惣吉	半治郎	平治郎	徳藏	伊之助	直治郎	勘藏	権兵衛	仙藏							

— 181 — (86)

主拾貳人 右四人

一釜屋壺 貳人

同 貳 壺人

同 三 壺人

四人 伝吉

一給士人 拾五人

同 貳 八人

貳拾三人 留次郎

一給士人三 八人 文右衛門

一壺 九人

貳 六人

三 六人

貳拾壺人 喜太郎

「貳 五人 三拾壺人

百拾九人 内

三〇人 三拾壺人

貳〇人 四拾八人

壺五人 三拾九人」

# ⑥【心得之事】

心得之事

一板之間九人

内訳

御膳所極方壺人

中通板先貳人

同 板先壺人

藏方 壺人

同 摺方壺人

切出し 貳人

中通り極方壺人

九人

一同手伝四人

内訳

中通り板先手伝貳人

同 摺方 壺人

御膳所鍋洗 壺人

一煮方手伝貳人

内訳

中通 油方壺人

酒方壺人

一板之間六人

内訳

御膳所極方壺人

中通り板先壺人

同 摺方壺人

同 極方壺人

中通り藏方壺人

同 切出し壺人

六人

一同手伝貳人

内訳

中通板先手伝壺人

同 摺方壺人

一煮方手伝壺人

油方二割付申候

# ⑦【御日割之控】

御日割之控

二月十三日十四日

一御殿内掃除之事

十六日壺

十八日式三

一御手水稽古之事

十九日

一御内見分之事

廿一日

一御清見分之事

廿二日

一御殿内清掃除之事

廿四日

一品川宿出役之事

〃

一御普請役御代官手附手代  
引移之事

〃

一今夕より御賄被下候事

〃

一御勘定奉行御見分之事

〃

一御道具取鋸之事

〃

一御馳走役人家来四五人引移之事

廿五日

一御代官御勘定方引移之事

〃

一御馳走大名并町方与力同心引移之事

〃

一雑掌用人先着之事

廿六日

一勅使別勅使女御使御着輿之事

⑧【日記】

日記

二月廿二日

一御道具請取之事

右ニ付会所小使中江砂こし酒切手式升遣ス

代 七百文 浜田屋拂

同廿三日

一前同断、罷出候事

右ニ付壹式三御膳所御掛江左之通差上候

一七寸万久煮染 三重

代金壹分式朱也

一山本山半斤入 三袋

代銀九匁也

ノ金式分ト式百六拾八文

暮六ツ時引取、明廿四日御見分ニ付、椀方暮方ニ請取物仕候ニ付、式三  
兼而壹人可差出旨被仰聞候

同廿四日

一石河土佐守様御見分、正九ツ半時相休候事

同廿五日

一御川支ニ付御延着之趣、此夜四ツ時御廻状到来之事

一御役所、右御伺ニ罷出候事

同廿六日

一入込之儀御伺ニ御掛り御役人迄罷出候事

同廿七日

一入込之事

二月廿七日昼迄  
三月二日夕迄

一食札 昼 千五百三拾九枚

夕 八百五拾五枚

内渡

一昼拾八枚 貳中通

夕拾八枚

一昼八枚 同椀方

夕八枚

一昼貳拾七枚 壺中通

夜貳拾七枚

一昼拾三枚 同椀方

夜拾三枚

一昼拾五枚 同配膳

夕拾五枚

一昼拾八枚 三中通

夕拾八枚

一昼八枚 同椀方

夜八枚

一昼拾六枚 貳三配膳

夕拾六枚

一昼貳拾九枚 壺貳三下部

夜拾五枚

ノ二百九拾六枚

御着輿 同廿八日天氣

一朝昼四拾六枚 壺貳配膳

夕貳拾三枚

一三度 貳拾四枚 三配膳

一三度 拾八枚 三御膳所

龜吉渡

一三度 七拾貳枚 壺御膳所

同中通り

但、御膳焚貳人藏方壺人除ク

ノ百八拾五枚

同廿九日天氣夕方雨

一三度 六拾九枚 壺貳配膳

一三度 貳拾四枚 三配膳

一三度 七拾貳枚 壺御膳所

同中通り

但三人引渡し而残廿四人分

一三度 拾八枚 三御膳所

六人分

ノ百八拾壺枚

内

御対顔 三月朔日天氣昼夕雨

一三度 貳拾四枚 三配膳渡

一三度 六拾九枚 壺貳配膳渡

一三度 六拾枚 壺御膳所

同中通り

内訳

但、御膳焚手伝共貳人、煮方手伝共四人、

藏方壺人、ノ七人除候

一三度 拾八枚 三御膳所

但、飯焚貳人除ク

ノ百七拾三枚	御能 同二日天氣	同	代金壹分
	一三度 貳拾四枚 三配膳	一同断三重	壹貳三
	一三度 六拾九枚 壹貳配膳渡	代錢三分	御膳所御掛り御役人方へ
	一三度 六拾枚 壹中通り	五日	
	但、七人分除ク	一山本山三ツ刻	同断御好ニ付差上申候
	一三度 拾八枚 三御膳所	壹斤	
	但、貳人除ク	八日御用済ニ付	
ノ百七拾三枚		一千菓子	壹御膳所筆頭
		かすていら二重折	岡田正助様
		代	
三四日両日分		同	
入 昼六百八拾四枚		一同断	貳同断
夕三百四拾貳枚		代同断	三枝寛五郎様
		同	
御三家御出 同三日天氣		一同断	三同断
一三度 七拾八枚 壹中通り		代同断	山田金次郎様
三御膳所		同	
ノ貳拾六人分		一醬油壹樽	岡田正助様
一三度 六拾九枚 壹貳配膳渡		代拾三匁五分	
一三度 貳拾四枚 三配膳渡シ		右者少々願筋有之候ニ付別段差上候	
ノ百七拾三枚		八日ニ別拂ニ付	
		一砂越酒壹升	会所小使中江遣ス
		代三百四拾八文	
		壹中通	
		一飯鉢	壹分
		一平	壹分
⑨【進物覚】			
進物覚			
三月朔日御対顔ニ付			
一うなき一重			
会所御掛り御役人方へ			

一坪 貳分  
 一二ノ碗 六分  
 一箱ノ蓋 貳分  
 二ノ中通  
 一坪 壹分 二ノ碗六分  
 三ノ中通り  
 一平 壹分 二ノ碗貳分

⑩【不足物】

不足物

一 手塩六枚 壹下部  
 赤平身斗貳分  
 同 ぬた壹枚  
 一 長皿貳枚 同碗方  
 中猪口四分  
 小皿六枚  
 一 焼物皿壹枚 貳碗方  
 長皿四枚  
 中猪口壹分  
 小猪口三分  
 手塩皿貳枚  
 一手塩皿四枚 下部  
 一 焼物皿壹枚 三ノ碗方

⑪【食札代渡方】

食札代渡方

一錢九貫六百文

貳ノ拾八人

一日 六拾四文引  
 八日分五百三拾貳文引  
 壹 三人  
 同煮方四人  
 三 拾貳人  
 碗方三拾人  
 下部貳拾壹人  
 一日六拾四文ツ、

駕籠部屋

三月二日

一昼札百枚

同四日

一同 百枚

一同百八拾枚

三百八拾枚

代銀百壹匁二分也

此金壹兩貳分貳朱卜四百拾壹文

⑫【内渡金】

内金渡

三月二日

壹貳三

一④金壹拾五兩也 中通

兼次郎

寅次郎⑩

徳次郎

新兵衛

内訳

金	壹分	
同	貳分	
同	三分	
同断		
一合同五両 <sup>㊦</sup>	椀方	右四人 <sup>㊦</sup>
内訳		
金		
同		
同		
一合同貳両貳分	下部	
和吉 <sup>㊦</sup>		
一合同五両三分	壹貳配膳	
留吉		
一合同貳両 <sup>㊦</sup>	三配膳	
文右衛門 <sup>㊦</sup>		
釜屋		
一合金壹両 <sup>㊦</sup>	伝吉 <sup>㊦</sup>	
⑬【鑑札請取渡】		
鑑札請取渡		
一御鑑札五拾八枚		
内		
拾八枚	壹貳三中通	四人渡

九枚 同断椀方渡  
四枚 配膳留次郎渡  
六枚 下部渡  
三枚 釜屋渡  
貳枚 文右衛門渡  
✂四拾貳枚

（裏表紙）

米屋  
直吉

口)「御膳所御料理方働人足御勘定仕上帳并下諸雑用」

(表紙)

勅使 三條大納言殿  
同御控 同 坊城前大納言殿  
別勅使 廣橋大納言殿  
女御使 堀川三位殿  
壹貳三

御膳所御料理方働人足御勘定仕上帳

并下拂諸雑用共

嘉永二己酉年二月廿五日御先着之処、川支<sub>二</sub>付

同廿七日御先着

三月七日御発興 但小ノ月也

⑭【御膳所中通働人足請負人数・賃銀】(帳簿Cと同内容)

二月廿二日  
同廿三日 御道具御取立両日

一銀拾七匁五分

御椀澄方五人

壹人二付三匁五分

一同三拾六匁八分五厘

中下椀方拾壹人

壹人二付三匁三分五厘

一同貳拾貳匁

同手伝拾人

壹人二付貳匁貳分

一銀四拾匁貳分

板之間拾貳人

壹人二付三匁三分五厘

一同貳拾貳匁

同手伝拾人

壹人二付貳匁貳分

一同三匁五分

御椀澄方壹人

一同三匁三分五厘

中下椀方壹人

一同四匁四分

同手伝貳人

一同貳拾六匁

右五拾貳人

小以銀百七拾五匁八分

弁当代五分ツ、可被下

二月廿七日  
三月七日迄 日数都合十日勤

一銀七拾匁

御椀澄方貳人

一同五百六拾匁

一日壹人二付三匁五分

一同三百壹匁五分

中通給士人拾六人

一同八拾八匁

一日壹人二付三匁五分

一同百八匁

中下椀方九人

一同五拾四匁

一日壹人二付三匁三分五厘

一同百匁五分

同手伝四人

一銀百匁五分

洗方六人

一同六拾六匁

一日壹人二付壹匁八分

一日壹人二付壹匁八分

青士運三人  
三職人

盛方三人

飯焚三人

一日壹人三匁三分五厘

同手伝三人

一同百匁五分	煮方三人	一銀拾七匁五分	御椀澄方五人
一同八拾八匁	一日老人三匁三分五厘 同手伝四人	一同式拾三匁四分五厘	老人二付三匁五分 中下椀方七人
一同五拾四匁	一日老人式匁式分 水汲三人	一同拾三匁六分	老人二付三匁三分五厘 同手伝六人
一同三百匁匁五分	一日老人壹匁八分 板之間九人	一同式拾六匁八分	老人二付式匁式分 板之間八人
一同八拾八匁	一日老人三匁三分五厘 同手伝四人	一同拾三匁式分	老人二付三匁三分五厘 同手伝六人
一同七拾式匁	下部給士四人	一同拾六匁	老人二付式匁式分 右三拾式人
一銀六拾七匁	一日老人壹匁八分 焼方式人	小以銀百拾匁匁分五厘	弁当代五分ツ、被下置候
一同式拾式匁	一日老人三匁三分五厘 同手伝壹人	一銀七拾匁	御椀澄方式人
小以銀式貫式百四拾壹匁五分	一日 式匁式分	一同式百八拾匁	一日老人三匁五分 中通給士人八人
合銀式貫四百拾七匁三分		一同百六拾七匁五分	一日老人三匁五分 中下椀方五人
右之通相違無御座候以上		一同六拾六匁	一日老人三匁三分五厘 同手伝三人
西三月	米屋 久右衛門	一同式百匁匁	一日老人式匁式分 板之間六人
御賄方		一同四拾四匁	一日老人三匁三分五厘 同手伝式人
御役所			一日老人式匁式分
式御殿			
二月廿二日御道具御取立兩日 同廿三日			

一同五拾四匁	洗方三人
一銀百匁五分	一日𦵏人𦵏匁八分
一同貳拾貳匁	飯焚三人
一同六拾七匁	一日𦵏人三匁三分五厘
一同四拾四匁	同手伝𦵏人
一同六拾七匁	一日 貳匁貳分
一同六拾七匁	煮方貳人
一同六拾七匁	一日𦵏人三匁三分五厘
一銀六拾七匁	同手伝貳人
一同拾八匁	一日𦵏人貳匁貳分
一同三拾六匁	燒方貳人
一銀三拾六匁	一日𦵏人三匁三分五厘
小以銀𦵏貫三百四拾匁	盛方貳人
合銀𦵏貫四百五拾匁𦵏分五厘	一日𦵏人三匁三分五厘
右之通相違無御座候以上	三職人 <sup>青士</sup> 運𦵏人
西三月	一日𦵏人𦵏匁八分
米屋	下部給士貳人
久右衛門	一日𦵏人𦵏匁八分
	水汲貳人
	一日𦵏人𦵏匁八分

御賄方	御腕澄方五人
御役所	𦵏人 三匁五分
三御殿	中下腕方七人
二月廿二日御道具御取立兩日 同廿三日迄	𦵏人 三匁三分五厘
一銀拾七匁五分	同手伝六人
一同貳拾三匁四分五厘	𦵏人 貳匁貳分
一同拾參匁六分	板之間八人
一同貳拾六匁八分	𦵏人 三匁三分五厘
一同拾參匁貳分	同手伝六人
一同拾六匁	𦵏人 貳匁貳分
小以銀百拾匁𦵏分五厘	右三拾貳人
二月廿七日迄 三月七日迄 日数都合十日勤	弁当代五分ツ、被下置候
一銀七拾匁	御腕燈方貳人
一同貳百八拾匁	一日𦵏人三匁五分
一同百六拾七匁五分	中通給士人八人
一同六拾六匁	一日𦵏人三匁五分
	中下腕方五人
	一日𦵏人三匁三分五厘
	同手伝三人

一同貳百壹匁	一日壹人貳匁貳分
一同四拾四匁	板之間六人
一同五拾四匁	一日壹人三匁三分五厘
一銀百匁五分	同手伝貳人
一同貳拾貳匁	一日壹人貳匁貳分
一同六拾七匁	洗方三人
一同四拾四匁	一日壹人壹匁八分
一同六拾七匁	飯焚三人
一同貳拾貳匁	一日壹人三匁三分五厘
一同六拾七匁	同手伝壹人
一同四拾四匁	一日 貳匁貳分
一同六拾七匁	煮方貳人
一銀六拾七匁	一日壹人三匁三分五厘
一同拾八匁	同手伝貳人
一同三拾六匁	一日壹人貳匁貳分
一銀三拾六匁	焼方貳人
小以銀壹貫三百四拾匁	一日壹人三匁三分五厘
	盛方貳人
	一日壹人三匁三分五厘
	三職人運壹人
	一日 壹匁八分
	下部給士貳人
	一日壹人壹匁八分
	水汲貳人
	一日壹人壹匁八分

合銀壹貫四百五拾匁壹分五厘	右寄附
右之通相違無御座候以上	右御殿
酉三月	一銀貳貫四百拾七匁三分
米屋	貳御殿
久右衛門	一銀壹貫四百五拾匁壹分五厘
御賄方	三御殿
御役所	一銀壹貫四百五拾匁壹分五厘
	合銀五貫三百拾七匁六分
	此金八拾八兩貳分ト永百貳拾六文九分六厘
	金五拾貳兩貳分 御内渡金
	金三分ト永百三拾六文二分六厘 壹分ツ、 定式引
	御殘金三拾五兩ト 永二百四拾文四分
	御高
割印	右合金八拾七兩貳分貳朱 錢七百四拾文 閏四月十七日頂戴入
食札代之分	
一食札三千四百八拾四枚	
此三分割千百六拾壹人三分	

代銀壹貫四拾五匁貳分

壹貳三

一銀四拾五匁

食座觸足輕三人

一日壹人壹匁五分

割印

ノ銀壹貫九拾匁貳分

閏四月廿三日受取済

此金拾八兩貳朱ト貳百八拾九文

合金百五兩三分貳朱ト 錢貳百八拾九文

⑮【働人足下払并諸雜用記】

嘉永二己酉年

壹貳三 働人足下拂并諸雜用記

壹ノ御殿

御兩卿

二月廿七日御先着  
三月七日御発興

貳ノ御殿

御壹卿

同断

三ノ御殿

御壹卿

同断

二月廿七日  
三月七日迄日数都合十日勤

一錢八拾七貫文

壹本人拾壹人

貳同 九人

三同 九人

ノ貳拾九人

壹人 三貫文ツ、

一日壹人三百文ツ、

壹手伝拾壹人

貳同 六人

三同 六人

一同四拾六貫文

一錢拾八貫文

ノ貳拾三人

壹人 貳貫文

一日壹人二百文ツ、

澄方六人

壹人 三貫文ツ、

一日壹人三百文ツ、

一同七貫五百文

壹平人三人

貳同 壹人

三同 壹人

ノ五人

壹人 壹貫五百文

一日壹人百四拾八文

小以錢百五拾八貫五百文

御場所請取二日分

一同七貫八百文

壹本人拾人

貳同 八人

三同 八人

ノ貳拾六人

壹人 三百文ツ、

壹手伝八人

貳同 四人

三同 四人

ノ拾六人

壹人 貳百文ツ、

壹貳三前後二而

藏方ノ拾貳人

一錢三貫六百文

壹人 三百文ツ、  
同断  
御澄方ノ拾式人  
壹人 三百文ツ、  
右六拾六人  
弁当代壹人 三拾式文ツ、  
小以錢貳拾貫四百文  
「徳次郎」「兼次郎」「新兵衛」「亀次郎」  
二口ノ錢百七拾八貫九百文  
此金貳拾七兩貳分ト百四拾八文  
内 金拾五兩 三月朔日渡  
引テ 金拾貳兩貳分ト  
百四拾八文  
兼次郎印  
徳次郎印  
亀次郎印  
新兵衛印  
二月廿七日迄日数都合十日勤  
三月七日迄  
一錢三拾三貫文  
壹本人五人  
貳同 三人  
三同 三人  
ノ拾壹人  
一日壹人三百文ツ、  
壹手伝貳人  
貳同 貳人  
三同 貳人  
一同拾貳貫文

ノ六人  
一日壹人貳百文ツ、  
壹平人七人  
貳同 三人  
三同 三人  
ノ拾三人  
壹人 一貫五百文  
一日壹人百四拾八文  
ノ錢六拾四貫五百文  
御場所請取之節  
一錢壹貫八百文  
壹貳三人六人  
壹ヶ所貳人ツ、  
壹人 三百文ツ、  
壹貳手伝六人  
壹ヶ所貳人ツ、  
壹人 貳百文ツ、  
右 拾式人  
弁当代 壹人三拾式文ツ、  
一錢壹貫二百文  
一同四百文  
ノ三貫四百文  
「徳次郎」「兼次郎」「新兵衛」「亀次郎」  
二口ノ錢六拾七貫九百文  
此金拾兩壹分貳朱ト四百六拾文  
内 金五兩 三月朔日渡  
引テ金五兩壹分貳朱ト四百六拾文

新兵衛<sup>㊦</sup>  
兼次郎<sup>㊦</sup>  
寅次郎<sup>㊦</sup>  
徳次郎<sup>㊦</sup>

日数前同断

一錢九貫文

壹本人壹人

貳同 壹人

三同 壹人

ノ三人

壹人 三百文

一同貳貫文

壹手伝壹人

一日 貳百文ツ、

〔伝吉〕

ノ錢拾壹貫文<sup>㊦</sup>

此金壹兩貳分貳朱卜四百三拾六文

内 金壹兩 三月朔日渡

引テ

〔伝吉〕

金貳分貳朱卜四百三十六文

釜屋

伝吉<sup>㊦</sup>

日数前同断

一銀五百七拾五匁

壹給士人拾五人

貳同 八人

ノ貳拾三人

壹人 銀貳拾五匁

〔留次郎〕

此金九兩貳分卜五百四拾文

内 金五兩三分 三月朔日渡

引テ

〔留次郎〕

金三兩三分卜五百四拾文

配膳

留次郎<sup>㊦</sup>

日数前同断

〔文右衛門〕

一銀貳百匁

三給士人八人

壹人 銀貳拾五匁

此金三兩壹分卜五百四拾文

内 金貳兩 三月朔日渡

引テ

〔文右衛門〕

金壹兩壹分卜五百四拾文

配膳

文右衛門<sup>㊦</sup>

日数前同断

一錢三拾壹貫五百文

壹食座九人

貳同 六人

三同 六人

ノ貳拾壹人

壹人 壹貫五百文ツ、

御場所請取二日分

一同壹貫八百文

貳貳三ノ拾貳人

壹人 百四拾八文ツ、

〔喜太郎〕

ノ錢三拾三貫三百文

此金五兩ト八百文

内 金貳兩貳分也 三月朔日渡

引テ

〔喜太郎〕

金貳兩貳分ト八百文

食座

喜太郎

惣下拂

ノ金五拾七兩貳分貳朱ト

錢四百九拾貳文

⑯【食札渡方】

食札代渡方

二月廿八日今三月六日迄ノ八日分

中通り四人江渡

一錢拾九貫七百三拾貳文

壹 七人

同断

一同拾六貫文

壹人 五百三拾貳文

一日壹人六拾四文ツ、

一錢拾壹貫貳百文

前同断

小以ノ錢四拾六貫九百三拾貳文

此金七兩貳朱ト六百貳拾文

右御発輿前夜相渡

⑰【諸雜用】

諸雜用

一金三百疋

御護摩料

一同三步

壹貳三料理人部屋番江遣ス

壹ヶ所壹歩ツ、

一同壹兩貳分貳朱ト

食札三百八拾枚代

四百拾壹文

但三枚ニ付八分ツ、徳兵衛江渡

一金壹兩ト

諸進物代ノ高

銀八拾壹匁八分

錢三貫貳百三拾貳文

内訳

煮染三重

壹貳三

貳 拾八人

三 拾貳人

ノ三拾七人

壹人 五百三拾貳文ツ、

一日壹人六拾四文ツ、

梶方江渡

壹貳三ノ三拾人

壹貳三食座ノ貳拾壹人

代金壹分式朱

御場所請取之節御膳所御掛り江壹ヶ所一重ツ、

山嘉園壹斤半

同

代銀九匁

右同断之節

うなき三重

御対顔之節壹式三御膳所

代錢三貫文

山嘉園壹斤

右同断之節御好ニ付上ル

代銀六匁

壹ヶ所三分割壹分ツ、

うなき一重

右同断之節会所御掛り江上ル

代金一分

干菓子  
かすていら二重折 三折

御用済之上御礼御膳所出頭方へ上ル

代銀五拾四匁

壹 岡田正助様

但壹折拾八匁ツ、

式 三枝寛五郎様

三 山田金次郎様

醤油 壹樽

岡田正助様江当年少々願節有之候ニ付上ル以後不及見合

代銀拾式匁八分

酒 三升

会所小使中江御場所請取之節式升

代金式朱

引拂之節 壹升

式百三拾六文

但壹升ニ付三百四拾文ツ、

ノ

一金三分ト

食札買上代

三百四拾六文

百九拾七枚

但三枚ニ付七拾六文ツ、

一同銀四拾三匁五分

中間一同割合

此金式分式朱ト六百四拾文

但金八拾七匁 壹両ニ付

銀五分ツ、

一金式朱ト錢四百六文

町方与力同心衆江進物代割合百文渡

一錢四百八文

仲ヶ間二軒江香典立替相渡

小以ノ金七匁式分ト 錢五百六文

⑱【下払惣計】

下拂

惣ノ金七拾式両壹分式朱ト 錢八百拾文

⑲【歎願】

乍恐以書付奉願上候

伝 奏御賄方御用向、數年來不相変被為仰付被下置候、且又当春御用向無滯奉相勤、冥加至極難有仕合奉存上候、然ル処今般 御参向御延着ニ相成、前夜諸向入込延引可致御下知有之候ニ付、御料理方働人足并ニ給士人之者共右之趣夜中夫々江相達候得共何分前以手当仕雇上置候得者誠ニ難渋至極仕候、尤右之者共儀者兼而御用向、以前諸向奉公住致居者も有之、主人方暇申請、又其日稼も相休居候処、右御延日ニ相成、乍恐一同難渋仕候ニ付、下方共々御延日ニ相成候日數之分、手当相渡具候様再応申出候得共、御時節柄之趣申聞、漸々御着日迄差留置、御用向之儀者無滯相勤候得共、何分下方共一同難渋之趣再応相歎候間、猶私恐多御儀御座候得共、格別之以 御憐愍御沙汰ヲ両日分御手当御下ヶ被成下置候様幾重ニも奉願上候

何卒御仁恵之御沙汰偏奉願上候、以上

嘉永二己酉年三月 米屋

久右衛門印

御賄方

御役所

右之通認メ差上候得共段々之御利解ニ而壹方斗之事ニ候得者何れニも取扱

候得共、一同之饗にも相成候間、此度者御手当不被下趣被仰間、願書御下ケニ相成申候

【註】

- 1 伊達玄菴「光台一覽」（『古事類苑 歳時部十 年始祝二』）。早稲田大学古典籍総合データベースに拠れば、同所蔵本の跋に宝暦一〇年の書写年代の記載があり、この「光台一覽」の成立年代は宝暦一〇年（一七六〇）以前となり、後述する寛政度の仕法改革以前に成立したことがわかる。
- 2 平井誠二氏の研究によれば、伝奏屋敷が設置されたのは寛永二年（一六三五）十一月のことであり、それ以前は寺院などへ宿泊していたようである（平井一九八八）。
- 3 小岩氏の研究成果の一端を紹介すれば「御馳走所到着時に老中、西丸老中、若年寄ほかへ知らせるべきか」「到着時に自分は式台薄縁まで迎えに出るか、家来は白州で出迎えるか」など。
- 4 本稿では將軍への使者として江戸へ派遣された公家衆を総称して参向公家衆、それらへの饗応役を参向公家衆御馳走役と表記する。
- 5 米屋田中家文書88309177。
- 6 この三つの他に朝鮮通信使の請負があった。朝鮮通信使の請負は、江戸での最後の聘礼となった宝暦一四年（明和元年・一七六四）以降、途絶えることになったため、米屋文書に現存する経営文書群が残り始める文化文政期以降の米屋田中家では、朝鮮人諸記を除く三つが家業の中核をなしていた。
- 7 『江戸町触集成』一九七四。
- 8 『江戸町触集成』二二八九。
- 9 『明和撰要類集十八』（『東京市史稿 産業篇二十三』六六六頁）。
- 10 米屋田中家文書88309160。オリジナルの表題は「歳中勤方帳」。
- 11 延享二年「記録」（同註5）。
- 12 米屋田中家の人足を差配しうる根源には、人足に食事を提供することが必須の要件としてあり、食事提供の実務を担う日雇人足の請負は、通日雇や門番人足の請負を生業とする米屋のような日用人足請負商人にとって重要な機能と位置づけられる。
- 13 『譚海』（国書刊行会、一九一七年）四八〇頁。
- 14 森山孝盛「賤のをだ巻」（『燕石十種』第一巻、中央公論社、一九七九年）。
- 15 前掲田中論文による。
- 16 「安永撰要類集」（『東京市史稿 産業篇二十七』一八九頁）。以下断りのない限り安永八年の記述は本史料を典拠とする。

- 17 公家の家に仕えた六位の侍のこと。青い袍を着たところからついた名称。本稿では青士に表記を統一した。
- 18 「寛政三亥年御日記春」(『東京市史稿 産業篇三十五』三三三頁)。
- 19 「南撰要類集三十五」(『東京市史稿 産業篇三十五』)。
- 20 参向公家衆が商品を持ち込んでいる可能性が指摘されているが、これを裏付ける記録は発見されていない。
- 21 「歳々記」より。
- 22 『藤岡屋日記』一卷二二三頁(田中一九九七年)。
- 23 最高ランクの給銀に勅使自身への給仕人足がみあたらないのは、勅使自身への給仕は近習などがおこなったものと推測される。御輿澄方の実態は残念ながら未詳。調理には、煮方・焼方・盛方・飯焚などがあり、それぞれに手伝いがついた。
- 24 【表2】参照。下部も同じ。
- 25 最終的に幕府が負担することになっていた人足への食事提供経費が、現金ではなく食札が使用された理由は未詳であるが、食事代金を現金で支給した場合、人足による代金持ち逃げが懸念されたからであろう。また多くの人足たちが同時に食事を摂れば食事場の混乱はある程度必至であり、現金での決済を回避することで現場の混乱を緩和することも意図したものと思われるが、制度の意図や実態は今後の研究に俟ちたい。
- 26 ③【食札早見】には、一日の基礎数を請負契約上の人数一七一に朝昼夕の三度かけた五一三の倍数を請取早見として一覧しているが、三四八四人は六・八日分相当になるものの、三四八四人の算出根拠を説明できなかった。
- 27 米屋田中家は伝奏御賄の請負によって高額の利益を得ていたのであるが、さらに追加支給を幕府に願ひ出て拒否されている。①⑨【嘆願】には、川支により到着が二日延期されたが、雇用した人足へは延着した二日分の給金を支払う必要がある、その分の補償を求めた嘆願であった。根拠は十分にあるはずである。しかし高額の利益からすれば、延着による損害も十分に飲み込めたはずであろうが、少しでも多くの利益の取得を重視した結果であろうか。米屋は幕府(御賄方御役所)に経費の追加支給を嘆願している。米屋の嘆願を受けた幕府は「此度者御手当不被下趣被仰聞、願書御下ケニ相成申候」とあり、拒否されていたことがわかる。

## 【参考文献】

- 市川寛明「江戸における人宿の生成と展開——六組飛脚屋仲間米屋田中家を事例に——」(『江戸東京博物館研究報告』七号、二〇〇一年)
- 「江戸における人宿商人の家業構成について」(『江戸東京博物館研究報告』八号、二〇〇二年)
- 「江戸城大手門の警衛と人宿」(『江戸東京博物館研究報告』一四号、二〇〇八年)
- 「元禄・享保期における日用人足請負商人米屋田中家の発展過程」(『江戸東京博物館紀要』八号、二〇一八年)
- 小岩弘明「沼田家本「勅使御馳走日記」とその周辺」(『関市博物館研究報告』六、二〇〇三年)
- 小林輝久彦「足守木下家文書「公家衆御馳走初中後之覚」について——高下吉良上野介への伺書——」(『大倉山論集』六四、二〇一八年)
- 田中曉龍「公家の江戸参向——江戸の武家文化との一つの接点——」(『近世都市江戸の構造』三省堂、一九九七年)
- 南和男『江戸の社会構造』(塙書房、一九六九年)
- 濱田明美・林淳一「江戸幕府の接待にみられる江戸中期から後期の饗応の形態」(『日本家政学会誌』Vol.40 No.12、一九八九年)
- 平井誠二「江戸時代における年頭勅使の関東下向」(『大倉山論集』二三輯、一九八八年)
- 吉田伸之「江戸の日用座と日用〓身分」(『近世史論叢』上、吉川弘文館、一九八四年)